

第二次世界大戦下における自由学園初等部の 学童集団疎開

菅原然子

(自由学園図書館・資料室)

原稿受付 2020年9月30日；原稿受理 2021年1月7日

GAKUDO-SHUDAN-SOKAI (Group Evacuation of Schoolchildren) in Jiyu Gakuen Elementary School during World War II

Noriko SUGAWARA

Jiyu Gakuen Library and Archives

本論では、1944年8月から翌45年10月まで実施された、自由学園初等部（以下初等部）の学童集団疎開について、記録資料を手掛かりにその全体像を概観することを試みる。学童疎開の研究は主に1980年代末より始まり、特に当時の都内区部の国民学校については実施自治体や研究者等の調査研究により内容が明らかにされてきている。しかし、私立小学校の学童集団疎開については、学校数自体が少なかったこと¹、また個別性が高かったことなどから、未解明な部分が多い。当時の学童集団疎開がどのようなものであったのか、その全容を明らかにするためにも、各私立学校での疎開の実施状況の調査分析は重要である。

初等部は東京都北多摩郡久留米村（当時）に位置し、ここはそもそも疎開受入地であった。しかし区部から通学する児童が多かったために、学童集団疎開を決断。44年8月より学内の女子部（高等女学校相当の各種学校）寮内に「南沢疎開寮」を開設、最遠地区に住む児童から入寮させた。同時に地方への疎開についても検討し、栃木県那須郡狩野村に那須疎開寮を開設、同年9月より5、6年が疎開した。区部に属さなかったことで、疎開場所の選定や輸送等、学校独自に決定する必要があったこと、そこには保護者の協力があったこと、区部の管轄下ではなかったものの、国や都の学童疎開政策にはおおよそ則った疎開であったこと等が明らかになった。

KeyWords: 学童集団疎開、第二次世界大戦、認定学校、私立小学校、国民学校

1. 問題の所在

1.1 研究目的と先行研究

1931年の満州事変から始まった約15年間の戦争では、国民の多くが様々な不自由を強いられた。1938年制定の国家総動員法により、国民全員が戦争協力にまい進することが求められ、それは小学校（のちの国民学校）の児童にとっても同様であった。特に、44年夏から始まった学童集団疎開では、東京都だけでも約20万人の児童たちが親から離れ、慣れない土地での生活を強いられた。

学童集団疎開に参加した当事者による回想録等は戦後多数発行されている。一方、学童疎開全般についての資料調査、研究は特に1980年代後半から本格的に始まり、市区町村による自治体史²から、日本全国の当時の疎開実態の俯瞰を試みるものまで、幅広く行われてきている。例えば逸見勝亮は「日本学童疎開史研究序説」³において、それまで学童疎開は44年6月30日閣議決定の「学童疎開ノ促進ニ関スル件」が起点とされていたが、37年公布の「防空法」

を起点とし、疎開政策の制定経緯を丁寧に追い、国家の「推奨」では思うように進まなかった疎開を、学童集団疎開を実施することで推進しようとしたことを提示した。また、後にこれらも含む国の関連政策と実態とを『学童集団疎開史—子どもたちの戦闘配置』（大月書店、1998年）にまとめた。他にも『学童疎開の記録』シリーズは、第一巻で「学童疎開の研究」を扱い「疎開させる側、疎開した側、受入側とそれぞれの視点から学童疎開の実態にせまりつつ、歴史の中に明確に位置づけ理論化をはかる学術的な研究論文を収録」している⁴。また、一條三子は学童集団疎開を受入地からの視点で研究し、再疎開等についても詳細にまとめ、『学童集団疎開』（岩波現代全書、岩波書店、2017年）において、さまざまな疎開政策の実際の運用と疎開地の実態についての解明を試みた。

しかしこれらの研究の殆どは、官立の国民学校を対象としたものにとどまり、私立学校については不足している⁵。それは、特に区部に位置していた私立小学校は、区の国民学校と同様の割り当て地へ疎開するか、学校独自の施設へ疎開するかを選択する必要がある、それぞれの学校によって対応が異なったことも原因と思われる。これまでの疎開に関する研究でも明らかのように、疎開はどの土地に行ったか、どのような施設を利用したか、などにより、様相が異なっており、その一つひとつの事例を丁寧に明らかにすることが、疎開政策全体の正確な実態をつかみ、検証へとつながる。よって、まだ脆弱である私立学校の疎開状況を学校単位で明らかにしていくことは、その全体の検証の一つの材料を提供することにつながると考える。

第二次大戦中に学童集団疎開を実施した私立小学校のいくつかでは、当時の資料をもとに分析が始められている。柄越祥子は慶應義塾幼稚舎に残る当時の記録に基づき、同舎の学童集団疎開を、後援会組織と主にその経済的基盤の視点から分析⁶、また別の論考では、疎開先ではなく東京本部を軸に疎開の様相の解明を行っている⁷。柄越はその中で、各学校、特に私立学校の学童集団疎開の様相は個別要素が強いが、そうした疎開経験について「各私立学校同士や一般の国民学校などとの比較によって、各私立学校固有の疎開経験を、戦時期の教育史の中に位置づけていく必要があるのではないだろうか」としている⁸。中村早苗は、青山学院緑岡中等学校の集団疎開の様相を、当時の在学児童であった大島照雄の日記をもとに明らかにした⁹。他にも、学校史などでは戦時中の学童疎開について扱ったものがあるが¹⁰、いずれにせよ当時の私立小学校の学童疎開全体の解明には至っていない。

本研究では、自由学園初等部の疎開を資料に基づいて概観し、また当時の東京都および国の疎開政策、他の私立学校との比較などを通じて、初等部の疎開がどのような特徴をもったものであったのかを考察し、学童疎開全体の解明の一助となることを目指す。

なお、本論文は2021年刊行予定の自由学園100年史第Ⅱ部各部教育「初等部」、第3章の中の「南沢と那須での学童集団疎開」の詳細版である。

1.2 研究の方法

本研究は、できるだけ当時の記録に沿って初等部の疎開の実態を時系列に整理する。主な参照資料は以下である（いずれも自由学園資料室蔵）。

- ・『昭和十九年度 日誌 自由学園初等部』（以下「日誌」）

初等部では1928年より教師によって学校日誌が書かれており、疎開の準備及び開始がされた1944（昭和19）年度のものも存在する（1945（昭和20）年度のものはない）。当日にあった出来事について、当番教師や、主事の佐藤瑞彦が記述している。特に44年7月からの疎開準備期間についての詳細が記されている。

- ・『昭和十九年度 自七月二十一日 至八月二十日 日録 初等部教師室』（以下「日録」）

上記は、1944年度の夏休み中の記録であり、「日誌」と同様、当番教師や、主事の佐藤が記述している。この休み中は、1学期に引き続き、疎開の具体的な準備が数多く進められており、その詳細が記録されている。

- ・『あしおと 私達の学童疎開体験』企画編集：初等部14回生、1977年（以下『あしおと』）

初等部で那須への疎開を経験した14回生を中心に編まれた回想録である。回想と共に、当時の日記や家族への手紙も掲載されており、疎開生活の様子がわかる貴重な記録である。

- ・村上せつ『自昭和十九年九月十日 至二十年十月二十五日 那須疎開生活記録 自由学園初等部』（昭和62年夏記す）（以下「那須疎開生活記録」）

上記は、当時の初等部教員であった村上せつが1987年に疎開を振り返ってまとめた記録である。村上は45年1月15日から引き揚げまで、那須疎開の引率を務めた。

2. 自由学園初等部の学童集団疎開

2.1 自由学園とは

自由学園は、1921（大正10）年、ジャーナリストの羽仁もと子・吉一夫妻によって、当時の高等女学校相当の各種学校として創設された学校である。それ以前、1903年に夫妻が創刊した雑誌『家庭之友』（1908年より『婦人之友』）の読者の家庭が主な支援者であり、読者家庭から多くの生徒が送られた。小学校は1927年、東京府北豊島郡高田町雑司ヶ谷（自由学園では通称「目白」）の自由学園校舎内で小学校令による学校として創設され、1930年に東京府下の久留米村（同通称「南沢」）へ移転した¹¹。元岩手師範附属小学校訓導の佐藤瑞彦が1928年より主事を務めていた。1941年の国民学校令により、国民学校に準ずる認定校となり、名称は自由学園初等部となった。創設当初から少人数学級で運営され、各学年1クラス編成。疎開当時は全校生徒が約180人だった。

なお、第二次世界大戦当時の自由学園は、女子部、初等部の他に、1935年設立の7年生中学校相当の男子部（各種学校）、39年設立の幼児生活団（育児組的幼児教育施設）があり、生活団以外は久留米村にあった¹²。このうち、女子部生徒は南沢、那須双方の疎開寮にて児童の世話にあたり、男子部生徒は授業の一環として滞在していた（疎開の意味も含む）那須農場にて児童へ昼食や野菜を提供した。

2.2 疎開までの自由学園小学校（1937～1941年）

日中戦争が本格化した1937年7月以降、自由学園も戦時体制へと組み込まれていく。37年10月から始まった国民精神総動員強調週間には、慰問袋の作成や皇居遥拝を開始。その後も戦争遺族への慰問や軍へ送る慰問袋の作成などが行われる¹³。40年には配給が始まり、運動靴やゴムまり、学童服などが配られた¹⁴。学校の久留米村への移転以来、父母からの申し出で続けられていた保護者による初等部の昼食調理では、食材の配給が寄宿舎（女子部、男子部生徒）のみになったため、各家庭から食材を持参するなどの影響があった¹⁵。

前述のとおり、小学校は1941年の国民学校令に基づき、自由学園初等部と改称、認定学校となった。国民学校令では、生活全体を教育ととらえ、教科教育では合科教育が目指される。創立以来、教科横断的な授業実践や、児童自身による学校での自治活動が行われていた初等部は、各地の国民学校からカリキュラムモデルとして注目され、参観者が絶えなかった¹⁶。

2.3 国の疎開政策（1940～1944年）

ここで、国の疎開政策について簡単に見てみよう。1944年6月30日、政府は「学童疎開促進要綱」を閣議決定し、縁故疎開を原則とするが、それができない児童については集団疎開を実施することを決定した。実際に大都市を中心とした空襲危険区域に在住する児童の疎開はこの閣議決定後から現実化されていくが、国内の疎開については、その4年前、1940年から問題化されている。

1940年の「国民防空指導ニ関スル指針」（陸軍参謀本部第一部第三課編）では、「老幼病者」以外の健常者の都市退去を禁止している。「疎開」の言葉が使われ始めたのは41年11月の防空法一部改正前後からであるが、それは建物疎開に関して使われ、相変わらず人員の「退去」の禁止・制限は続いていて、都市部から逃げ出すのはけしからん、国民総動員で戦時体制を、という姿勢は変わらずにあった。しかし一方、同年1月の時点で文部省は英国の学童疎開に関する調査を実施している。

1942年4月の東京・名古屋・神戸への米軍による奇襲、6月のミッドウェー海戦を皮切りに、南方での相次ぐ敗戦などにより、本土空襲の危険が高まった。43年9月の「現状勢下ニ於ケル国政運営要綱」（閣議決定）では、初めて「人員ノ地方分散ノ総合的計画ヲ樹立実行ス」と、人の疎開について触れられることとなった。同年10月にはこれを受けて「帝都及重要都市ニ於ケル工場家屋等ノ疎開及人員ノ地方転出ニ関スル件」が閣議決定された。続く12月には「都市疎開実施要綱」が閣議決定され、疎開実施区域の重要都市12都市が指定される。東京は区部が対象となった。

1944年2月の「決戦非常措置要綱」(閣議決定)では東京の200万人の縁故疎開を想定したが、実際には2月時点で18%ほどの達成率であり、縁故疎開はなかなか進まなかった。これを受けて、東京都では区長へ「学童疎開奨励ニ関スル件」によって年度末(44年3月)までにできるだけ縁故疎開者を増やすよう通知したが、44年4月1日時点では対象となる児童80万6608人中、わずか7万4758人(9.3%)にとどまっていた。同年4月5日、都は「東京都国民学校戦時疎開学園設置要綱」「東京都国民学校戦時疎開学園設置要綱実施細目」を区長へ通知。国にさきがけて東京都として独自に都立の養護施設などを有償で借り上げ、学童集団疎開を実施するとし、細目では付添人や費用についてなども明記した。3日後の4月8日には、防空総本部から学童の縁故疎開の希望申告を4月末までにまとめるよう通牒が出る。

そして1944年6月16日、B29による北九州八幡製鉄所の集中爆撃があり、本土空襲が現実のものとなった。6月30日には「学童疎開促進要綱」が閣議決定され、「帝都学童集団疎開実施要領」が決定に添付される。また7月10日には「帝都学童集団疎開実施細目」が内務省防空総本部から出されるが、この2つは前述の「東京都国民学校戦時疎開学園設置要綱」「東京都国民学校戦時疎開学園設置要綱実施細目」を多少手直したものであった¹⁷。初等部の疎開も、基本的には「帝都学童集団疎開実施要領」および「帝都学童集団疎開実施細目」、そして後述する「認定学校児童集団疎開実施特例」に則って行われていく。

2.4 自由学園初等部の疎開対応(1944年7月)

初等部の「日誌」で疎開についての記述が始まるのは、1944年7月1日である。「栃木縣に疎開して行った三年、一年のY姉妹がかへって来ました。」¹⁸とあり、すでにこの時期には家庭で疎開をした子どもが初等部にもいたことがわかる。

同月12日には日誌に集団疎開に関する記述がある。「教師会では、前から様々の機会に各方面で問題になってきた学童疎開について羽仁先生の御考へを伺ふことが出来ました。一時も早く実行を希まれてゐることであつたので私共も安心をし、その準備に今度は力を注ぎたいと思ひます。来週の月曜日に臨時父母会を開き、第一に縁故疎開、第二に学校を縁故先としての集団生活をお話し決定することになりました。」¹⁹。

前日の7月11日には、都の国民教育課より各区の疎開先の仮割り当てが発表されており²⁰、いよいよ学童集団疎開の実施が具体的になってきた頃であった。国の方針も、まずは縁故疎開をすすめ、それでもどうしても疎開先の見つからない児童については集団疎開を実施するというものだったので、初等部もそれに沿った方針であったことがわかる。2日後の7月14日には、その時点での縁故疎開希望児童を調べており、合計で8名だった²¹。

このように疎開の検討が始められていたが、そもそも初等部が位置する北多摩郡久留米村は、疎開対象地域ではなく、むしろ都心の学校の疎開受入地となっていた²²。しかし、児童の中には区部から通学する者も多く、通学路の安全等を考慮すると早急の疎開が必要と判断された²³。ただ、割り当て地などもないため、疎開をする場合は、すべて自前で準備をする必要があった。そこで、疎開受入地であることも鑑み、自由学園では当初、学内の女子部生徒が使っている寮内に初等部児童のための疎開寮を開設。「南沢疎開寮」として、区部から通う児童を受け入れることにした²⁴。

7月16日には、都から、区部の国民学校長を集めての説明会が実施されている。そして翌17日には児童保護者へ向けて、集団疎開か縁故疎開、どちらを希望するか、所定の様式で書面を作成し、「数日中に」希望を出すようにとの通達があった²⁵。国民学校の3年生以上の保護者全員が対象であった。これは、疎開を国が強制するのではなく、あくまでも各家庭の「希望」によって実施するという形を死守していたからだ。初等部は区部になかったため、こうした希望書の提出はおそらく不要ではあったが、他の区部の国民学校とほぼ同時期に疎開希望者の調査をしていたことがわかる。

2.5 認定学校の疎開と初等部の対応(1944年7~8月中旬)

認定学校の疎開先については、東京府からは以下のような通牒があった。初等部はこの「認定学校児童集団疎開実施特例」に沿って疎開準備、および実施をしたと考えられる。

「125 認定学校学童疎開促進に関する件

(略)

認定学校児童集団疎開実施特例

一、疎開先

学校所在区ノ属スル別表ノ疎開先トス、但シ自校ノ養護学園、林間学校、臨海学園等ニ集団疎開セントスル場合ニ限り例外トシテ之ヲ認ムルモノトス

二、宿舍

宿舍ハ所管区長之ヲ割当ツルモノトシ其ノ借入、設備等ニ付テハ区長ノ指示ヲ受ケ設立者之ニ当ルモノトス

三、教育

(1)疎開先ノ教育ハ都立国民学校ノ例ニ倣ヒ疎開先県ト協議ニ依リ設立者ノ直営又ハ地元委託ニ依ルモノトス

(2)疎開先ノ教育ニ必要ナル教職員ハ認定学校教職員ヲ派遣スルモノトス

四、経費

(1)経費ハ設立者及保護者ニ於テ負担スルモノトス

(2)設立者及保護者ニ於テ経費ノ全額ヲ負担シ難キ場合ハ設立者ノ申請ニ依リ左ノ経費ニ付予算ノ範囲内ニ於テ都之ヲ負担スルモノトス

イ、輸送ニ要スル経費

ロ、宿舍ノ借上及設備ニ要スル経費

ハ、食費

ニ、寮費

ホ、開設費

(3)前号ニ依リ都ニ於テ経費ノ一部ヲ負担スル場合ニ在リテハ保護者ハ児童ノ生活費ノ一部トシテ月額十円ヲ負担スルモノトス

五、其ノ他

(1)前各項ニ定ムルモノノ外本件実施上必要ナル事項ニ付テハ都立国民学校ノ例ニ依リ措置スルモノトス

(2)設立者ハ本件実施ニ関シ所管区長ノ指揮監督ヲ受クルモノトス

(3)設立者ハ集団疎開実施計画ヲ樹テ所管区長ニ申請スルモノトス」²⁶

つまり、認定校も基本的には所在区に割り当てられた土地へ疎開するが、各学校所有の施設へ疎開する場合はそれも認められていた。この通牒の起案年月日は1944年7月21日、決裁年月日は同年7月23日である。当時の初等部主事であった佐藤は、同年7月21日午前、疎開書類を提出のために中央教育局へ出張との記録が残っている²⁷。また、翌22日午後には、「都教育局へ疎開ノ件ニツキ私立学校長会召集ノタメ出張サル」²⁸との記述があり、この日に都から私立学校長へ疎開に関する何らかの通達があったと考えられる。

上記「認定学校児童集団疎開実施特例」によると、認定学校であっても基本的には所管区の監督下で疎開を実施することが求められており、実施計画なども区長への提出が求められている。7月に佐藤が都の教育局へ日参していたのは、区に属さない初等部の疎開計画について、都へ直接持参していたのではないかと²⁹。

記録によれば、1944年7月23日の教師会において、1～6年の児童のうち、寮に受け入れる児童を数えると、130人になったとある。また同日に「他校からの疎開入舎希望申込がだんだん多いやうだ」との記述もあり、自校の児童以外にも入舎を希望する児童がいたことがうかがえる³⁰。なお、後の8月21日の「日誌」には「初等部全員数一八二名となる。」³¹との記述があり、7月18日時点で縁故疎開を希望した22人を除き³²、160名中130名が対象となったことがわかり、前述のとおり、殆どの児童が区部から通学していたことが予想される。

1944年8月10日から羽仁学園長と初等部教師との疎開の相談が始まっている。同日の「日録」には「那須の方がまだはっきり決定していないので着々と進行させることは出来ませんが」との記述があり、この時期には南沢疎開寮だけでなく、那須への疎開についての検討も始まっていたことがわかる。後年の佐藤の回想によれば、疎開先検討の際には、佐藤の郷里である岩手県も考えたが、保護者の面会のことを考えると遠すぎる。「もっと手近で来て頂くのに

都合のよいところ」として、「那須の国立種馬所をしておられた東氏が居られることに思い注がれ、そこにどこか適当な建物は？」と考えついたという。そこで保護者である東胤駿子爵の協力を仰ぎ、東の尽力で種馬所の国道を挟んで向かいにあった馬事研究所³³の官舎を借りられることになった³⁴。

8月14日には緊急父母会が召集され、午後2時より4時まで、疎開生活についての具体的内容が保護者へ伝えられた³⁵。翌15日の「日録」には「南沢疎開寮」との記述が初めてある。翌16日には、南沢疎開寮への入舎のため、入舎予定児童が登校して寮で使う整理箱をつくった。また、母親への持ち物の説明も行っている。教師は羽仁もと子と疎開の相談を実施し、「女子部の方³⁶に手伝って頂くこと」と、もと子も半月は那須に滞在することが伝えられた。8月18日には佐藤、落合、羽仁もと子の3人が那須の馬事研究所へ、打ち合わせへ行ったとの記録がある³⁷。

2.6 南沢疎開寮での疎開が始まる（1944年8月下旬）

1944年8月21日は初等部の第二学期の始業式だった。この日羽仁もと子は子どもたちに直接、疎開生活に対する心構えについて話した。そしてこの日は最遠地区に住む1～6年34人の児童が入寮。学校から直接寮へ帰った。教師の堀江いち子が荷物の置き方などを指導し、高等科2年の女子部生徒が食事その他に協力した³⁸。日録には、母親への寮母就任の打診をしていた記述があったが、児童の母親が実際に協力した記録はなく、女性教師と女子部生徒が児童たちの世話をしていた。

8月28日には南沢疎開寮へ、第2回の入寮が行われた。「今週は落合、西英子さんの二人がとまり込み」とある。女性教師の名前であり、実質寮母の役割は教師が交代で担っていたことがうかがえる。また、主事であった佐藤も時々夕食に入り、子どもの様子を見守った³⁹。9月3日には第3回の入寮が行われ、この時点で疎開人数は70名となる⁴⁰。「アト、十名入れれば満員也。」との記述があり、寮の収容可能人数は80名程度であったことがわかる⁴¹。

寮生活での児童はおおむね健康で、開寮当時、週末に自宅へ帰ると⁴²、親から「肥った」と言われたという児童もいた⁴³。9月5日には佐藤が日誌に「寮生活も順調にてうれし。病人の出ないことが何よりのこと也。」と書いており、子どもたちが元気に疎開生活を送っていたことがうかがえる。

2.7 同時並行で進められた那須行の計画（1944年8月下旬～9月9日）

南沢疎開寮での疎開生活が始まると同時に、那須への疎開についても具体的な予定が決められていった。8月22日には那須行の対象学年は5、6年と決定。4年以下は南沢で過ごすことになった⁴⁴。同日に佐藤は馬政局へ出向き、お礼と今後の打ち合わせをしている⁴⁵。25日には教師である佐藤、阿部、野坂の3人が那須へ出張し、宿舎を見ることを決定。実際の那須疎開の引率は阿部、野坂の2人を担当者とし、他に女子部高等科生徒5名、母親2名が手伝い（所謂寮母職）として同行することが決まった⁴⁶。東京都の「東京都国民学校戦時疎開学園設置要綱実施細目」（1944年4月5日）によれば、疎開の付き添いについて都は、園長を国民学校長、副園長を当該区の国民学校訓導、1学級に1人の割合で国民学校訓導または助教、児童20～30人に1人の割合で寮母（「教員保母ノ資格アル者及高等女学校卒業程度ノ学力アル者」）、1施設に1人の養護訓導または養護婦などを想定していた⁴⁷。学園の那須への疎開は独自に行ったものであったので、おそらくこれを目安として、2学級なので教師2名、寮母の任務は「生活指導及び実務担当として」⁴⁸女子部生徒が担ったものと思われる。

引率者の一人、阿部徳右衛門⁴⁹は東北出身。自身の家族は郷里の岩手へ疎開させたので、自分が、と引率教師に名乗りを上げた⁵⁰。当時、国民学校では引率教師の確保が大変で、短い準備期間にどのように人数を確保するかが喫緊の課題となっていたが⁵¹、学園は小規模校であったこと、阿部のように自ら手を挙げて引率を引き受けた教師がいたことから、短期間で準備が可能になったともいえる。

8月27日には実際に上記3名の教師が那須へ行き、馬事研究所長佐藤博士に会い打ち合わせを行った⁵²。28日には主事の佐藤が5、6年児童へ那須行のことを話し、南沢に残る4年生以下の児童たちへ何を置き土産とするか、を相談した。その結果「五六年今週の目標 月 お食堂の態度 よくかんで食べる 食器を大切に ご飯をこぼさぬやうに入る時、終わった時」⁵³が決まったことが記録からうかがえる。

8月28日には、その後の那須行のための予定が組まれた記録がある（佐藤による）。

「(明日)二十九日(火) 梶浦鉄道監を訪問、いろいろとお願いする(荷物の運送等につき)
三十日(水)ミセス羽仁を中心にして相談。右がすんでお母さまたちに来てもらひ、具体的な伝達する。
九月六日頃——大荷物として発送すること。
九月八日頃——先発隊先発。
九月十日頃——子供達乗り込み。」⁵⁴

「梶浦鉄道監」とは、当時初等部、男子部、女子部に子どもが在学していた保護者・梶浦浩二郎であり、初等部の疎開の荷物の輸送等について尽力した。

この予定はほぼ日程通りに実現された。佐藤は8月29日、運通省鉄道監梶浦と荷物輸送について相談、その紹介で新橋運輸事務局の係、また荷物を発送する目白駅長とも要談をしている⁵⁵。そして翌30日には「東京鉄道局疎開事務東京支区」にて荷物を9月5日に目白駅より貸車にて発送することを決定。「東京鉄道局旅客課疎開係の渡辺主任」との要談によって、子どもの出発は「九月十日午前十一時五〇分、第一三一系列に乗車を確定」となった。こうした決定事項を同日中に「東京都教育局疎開係木下氏」へ報告、その後東京交通公社にて団体疎開乗車券購入申し込み(9日購入予定)をした。また、目白駅長に会い、荷物の発送についての打ち合わせを行っている⁵⁶。

南沢疎開寮へ入寮していた5,6年はその後那須へ移動することになるが、出発前2週間は家で過ごすようにとの学校側の配慮から自宅へ戻り、通学した⁵⁷。

9月に入り、1日には5,6年だけの父母会を開催し、那須行の詳細について伝達。翌2日には、佐藤が児童たちと疎開について話し合いをしている。「南沢生活組」と「那須生活組」に分かれて、そのそれぞれが「ヨクミル、ヨクキク、ヨクスル」生活の「徹底奮発」について話し合った⁵⁸。

9月3日には那須へ疎開させる「校具」についての選定が行われる。また、翌4日には南沢疎開寮へすでに入寮していた5,6年児童の荷物を那須へ発送するため、目白駅へ搬入している⁵⁹。他の5,6年児童の荷物は翌5日に各家庭より目白駅へ搬入された。この日早朝より佐藤、野坂、女子部高等科生徒5名が目白駅に出張し、当日午後の貸車への積み込みに備えた。この日に校具、児童荷物、全ての積み込みが終了。「アトは「人」を運ぶを残りしのみ」の記述がある⁶⁰。この荷物は疎開先の最寄り駅である西那須野駅へ運ばれるが、その駅での荷物の積み替え、及び宿舍への運搬については、学園農場である那須農場主任の竹下晃郎に依頼した⁶¹。

9月6日には羽仁もと子、吉一と初等部教師により那須での疎開生活についての話し合いが行われ、那須疎開の正式名称等が以下のように決まった。

「栃木県那須郡狩野村、馬事研究所内 自由学園疎開学級

五、六年参加希望者 六十二名

初等部教師 二名

主任 阿部徳右衛門

野坂真喜子

生活指導及び実務担当 女子部高二生徒五名同行」⁶²。

この相談の席でもと子は「子供に出来る領分と出来ないことの区別、及びそれに関わる教育指導の分野領域をチャンとやらせたい、これを根本の方針としたい」と発言した⁶³。自由学園では創立当初より使用人をおかず、生徒自身の手で掃除等をし、学内を整えることを行ってきた。しかし、初等部の児童が親元から離れて生活する疎開の場においては、子どもに過重な負担がかからないようにとの配慮とも読み取れる(以下、那須の疎開寮については「那須疎開寮」とする)。

9月7日、先発隊として野坂と女子部高等科2年の生徒4名、合計5名が那須へ出発した。この日の日誌には、転入生のことと、総人数の記述があり、それによれば、7日時点で186名(男子75名、女子111名)。8月21日の時点より4名増えていることがわかる。実は当時、初等部には他の国公立の国民学校からの転入児童が多くいた。残されている記録⁶⁴だけを追っても、44年度に初等部へ転入した児童は12人。国公立の国民学校へ子どもを通わせる親が、自校の集団疎開の概要を父母会などで聞いて、食糧事情等が心配になり、自由学園へお願いしたいと転入を希望するケースが多かったようである⁶⁵。

9月8日は佐藤が、出発当日の集合駅である上野駅にて駅長と打ち合わせを実施。駅長からは、鉄道局からも交通公社からも何の通報もきていないと言われたため、疎開について説明し、最終的には、午前10時半までに外の広場へ集合、10時50分に列車が入るのですぐに乗車させることで話がまとまった⁶⁶。切符は9月9日(出発前日)に約東通り交通公社へ購入に行ったが、ここでも「どこからも何の通知もないから....」と渋られる。そこで説明をし、最終的に団体乗車券が購入できた。「賃金は全部都の負担にして都から貰ふからとのこと、大いによろこぶ」とあり、切符代は都から支給されることがわかる⁶⁷。この日、佐藤は宿舎提供者である馬政局へ出向き、「馬事研究所借用」の公文願書を提出した。ここで陸軍獣医学校から馬事研究所借用の申込があったことがわかる。馬事研究所長の佐藤は初等部との約束を破棄し、陸軍へ貸そうとしたようだが、庶務課長が気を遣い、手を打った。日誌には「早く正式に一札を入れさせ現長官名での許諾書を■に上げておきたいとのこと。即ち持参の公式願出書を手交してかへる。大丈夫更改はさせぬからとの両氏の言に安心して帰る。」⁶⁸とある。当時の馬政局の職員によって、初等部への借用が守られたことがわかる。またこの日、5,6年児童には、合計「三十貫」(約113キロ)の持ち込み野菜を分配した⁶⁹。

このように、疎開の準備は、44年6月30日の国の学童集団疎開実施の決定後、初等部では疎開地の決定(南沢疎開寮及び那須疎開寮)から始まり、荷物運搬、児童の乗車券購入、引率教師、寮母の検討などが7月末から9月上旬という極めて短期間に行われたことがわかる。全国的にも都市部からの学童集団疎開の準備は7月から9月という2か月強の間にあわだしく行われたが、初等部も例外ではなかった。初等部では南沢疎開寮が2学期より開寮しており、この寮の運営と那須行の準備が同時並行で行われたことを考えると、連日出張をした佐藤をはじめ、教師たちの負担はかなりのものであったと予想される。

2.8 那須での疎開生活

ここでは主に那須で行われた疎開生活について記録に沿って可能な限り時系列に概観する。

2.8.1 那須への移動(1944年9月10日)

9月10日。予定通り上野駅から5,6年児童59名が那須へ向けて出発した。11時に列車へ乗り込み、11時52分に出発。16時過ぎに西那須野駅に到着。駅でバスに乗り換え、17時10分に宿舎である馬事研究所の官舎に到着した⁷⁰。すでに現地に行っていた児童1名を加え、60名で疎開生活が始まる。2名は治療のため後から行くこととなった⁷¹。

図1-1は当時の那須の地図である。初等部の疎開に関わる3か所、那須疎開寮(馬事研究所)、自由学園那須農場、西那須野駅を見ると、馬事研究所から農場までは直線距離で約4キロ、西那須野駅までは約6キロだった。初等部が借りた宿舎は馬事研究所内の西那須野寄りのはずれにあった。建物は玄関で靴を脱ぎ、廊下へあがると正面が食堂、右手に女子の部屋、食堂の奥の左に男子の部屋が並び、横長の木造平屋の建物だったという。部屋は全て畳敷きで、部屋割りは六畳の部屋に5,6人ほどの縦割りで13室⁷²あり、洗濯物は軒下に干すようになっていた⁷³。このほかに1軒家が4軒あり、これらもすべて借り上げ、引率の教師、女子部生徒が使用した⁷⁴。

なお、羽仁もと子はこの那須行きに同行し、到着後児童たちに疎開での心構えについて話をした。もと子の学童集団疎開についての考えが語られているので、以下に内容を抜粋する。

「子供はお国の宝です。子宝は可弱いものです。この可弱い無力な御宝を保護せずに、敵の爆撃の中に放つて置くのは相済まないことです。それだから特に危険な区域に住んでゐる子供たちを疎開させることになりました。(中略)皆さんのお父さんお兄さん親類の中からも出征してゐる方たちが多くあるでせう。皆さんもその戦争のために独立してこゝに来るやうになつたのですよ。(中略)弾丸の来る気遣ひのない所に来させて貰ひてゐるのだから、呑気どころではなく、唯の富り前だけでなく、毎日々々賢いこと強いことさうして真実なことをめざして生活するのが、学童疎開の使命です。」⁷⁵

当時の東京都長官・大達茂雄は国民学校長会議における訓示で、疎開は「帝都学童の戦闘配置を示すものであります。」⁷⁶と話し、疎開は退避ではないことを強調した。しかし、上記のもと子の文章には、「戦闘配置」より、「学童の生命擁護」のほうが強く打ち出されているようにも捉えられる。

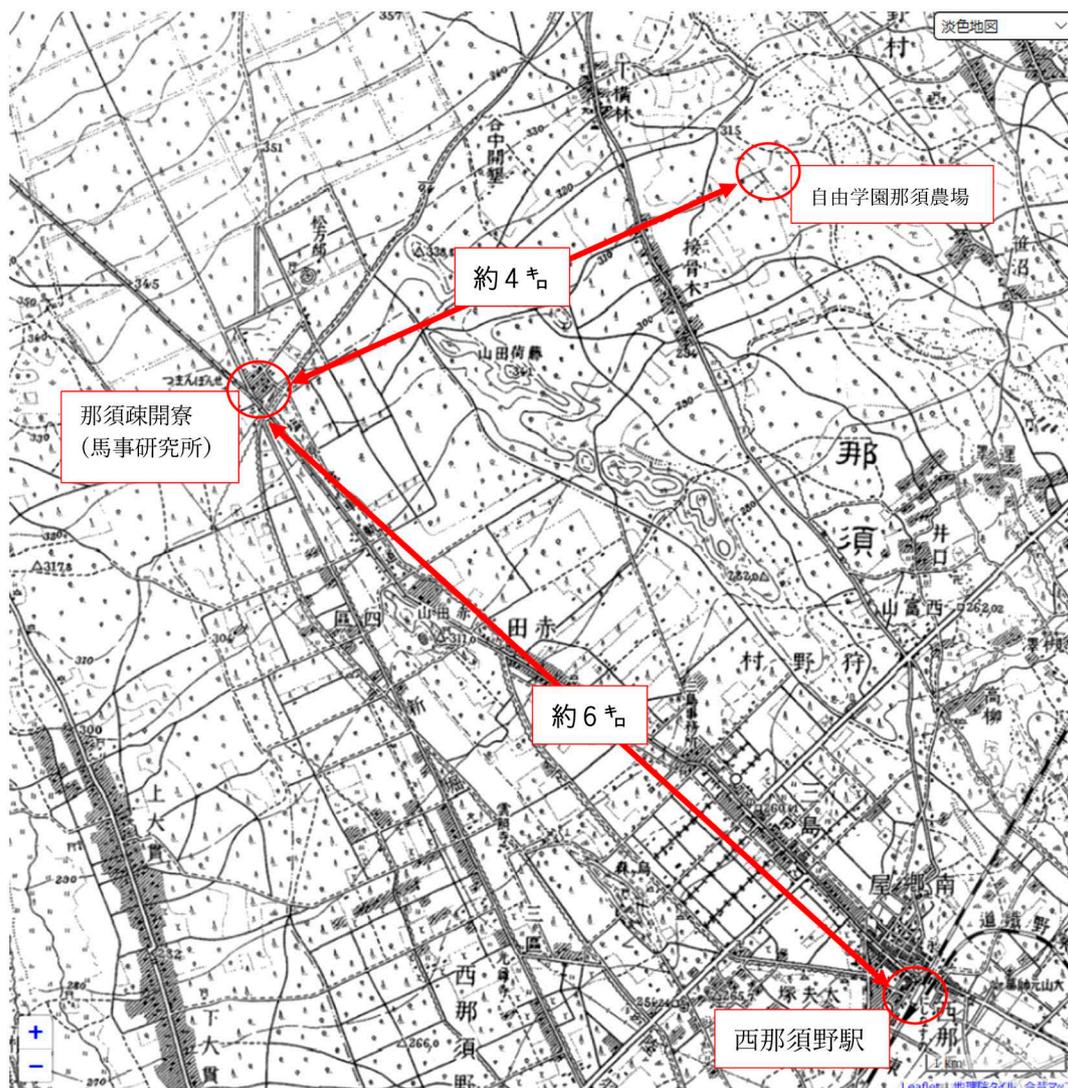


図1-1. 那須疎開寮（栃木県那須郡狩野村馬事研究所）、自由学園那須農場、西那須野駅の位置関係図。疎開中、児童たちは農作業等のために頻繁に農場へ通い、配給物や家からの荷物を受け取るために西那須野駅方向へも徒歩で通った。（地図出典：「今昔マップ」1928～1945年に筆者書き込み。

http://ktgis.net/kjmapw/kjmapw.html?lat=36.912111&lng=139.956798&zoom=14&dataset=kanto&age=1&screen=2&scr1tile=pale&scr2tile=k_ort_old10&scr3tile=k_cj4&scr4tile=k_cj4&mapOpacity=10&overGSItile=no&altitudeOpacity=2

2.8.2 1日の時間割

那須では、自由学園が全学的に掲げていた「生活即教育」を実践する場として疎開を捉え、具体的には自労・自治・協力をもって疎開生活を切り拓くことが目指された。掃除・洗濯をはじめ、食事の支度や配給物の受け取りなど、大人の力を借りながらも、できる範囲のことは児童が担当することになった⁷⁷。初等部では日頃から週番制度を設け、上級生数人が当番制で1週間のリーダー的役割を果たしていたが、疎開先でも部屋ごとに週番室がまわり、学校で実践されていた自治生活の継続が目指されたようだ⁷⁸。

当時の疎開生活の時間割について、家族への手紙に書き送っていた児童がいる。

「私たちはね、朝、五時に起きて冷水まさをするのよ、ねむくて困っちゃうわよ。朝ごはんまでに身支度、体操、掃除をして、ごはんのあとは九時まで宮城遙拝、礼拝をします。お洗いやお料理はみんな私たちでやるのよ。なんでもかんでもへやごとにやります。

午前中はたいてい三時間、勉強をしておひるごはんをたべます。午後はふくしゅうの時間や自由時間や仕事なんかでいっぱい五時からお掃除をして五時半からごはんを食べます。とくべつの事がある時はお洗いがすんでから報

告会をして八時にねます。(中略)勉強は、五年と六年にわかれて食堂で算数、阿部先生の家で国語をやる時は松下村じゅくみたいよ。(九月二十七日)」⁷⁹。

この記録から、1日のだいたいの時間割がわかるだけでなく、初等部の児童は現地の国民学校へ通うのではなく、疎開場所で引率教師から授業を受けていたこともわかる⁸⁰。阿部は同敷地内にあった一軒家を使っていたが、その建物も教室として使われていた。宮城遙拝、礼拝は、東京にいた時にも続けていたが、那須でも変わらず行われていたことがわかる。

午後の勤労については、那須農場での労働・増産(草取りや畑仕事などの農作業)、豚当番(44年11月以降)、荷物運搬(配給物や家からの小包の受け取り)、牛乳運び(那須農場)、燃料拾いなど。夕方の働きとしては、宿舍の掃除、風呂焚き、洗濯ものの取り込み、夕食準備などが行われた⁸¹。那須農場での労働は、那須到着直後、9月13日から始まった。初日はさつま芋畑で2時間半の草取りが行われている⁸²。配給物の受け取りは主に西那須野駅で、片道約6キロの道のりを、児童4,5人と女子部生徒1人で大八車を押して通った⁸³。

このように、生活、労働、学業を児童教師が一緒になって行うことは、疎開政策の中で初期の頃からうたわれていたことである。特に前述の「東京都国民学校戦時疎開学園設置要綱」の中には以下のような教育方針が具体的に掲げられていた。

「二、疎開学園ニ於ケル教育ハ左ノ方針ニ依ルモノトス

- (1)行学一体師弟同行ノ錬成ヲナシ特ニ生活訓練ヲ重視スルコト
- (2)勤労ヲ重視シ、農耕畜産水産業其ノ他環境ニ即スル作業ヲ課スルコト
- (3)学勤労体錬等ノ時間配当ハ状況ヲ勘案シ之ガ適正ヲ期スルコト
- (4)教科ノ修練ハ学年別ヲ原則トシ自学自修ノ指導ヲ重視スルコト
- (5)生活訓練ハ上級生ト下級生ヲ包含スル班ヲ組織シ共励切磋ヲ旨トスルコト
- (6)教育方法ノ具体策ハ園長ニ於テ作成シ予メ都長官ニ開申スルコト」⁸⁴。

上記(1)については、国民学校においてもこの集団疎開を24時間師弟共に過ごせる理想的な教育実践の場として熱心に疎開地教育に取り組んだ教師もいた⁸⁵。初等部もそれに近く、後年、佐藤は回想で次のように書いている。

「私が、はじめから念頭に置いたことは、南沢では寝食を共にするということが出来なかったが、この疎開生活では文字通り二十四時間一緒に生活である。文字通り生活を共にする毎日となり、前から考えていた「全日教育」が可能になったことであつた。もとより、生活そのものは不便極まる中でのもの、この不便の中で師弟共働の生活はどちらにもよい勉強になった。」⁸⁶。

また、(2)の勤労についても、到着早々宿舍の庭の草刈りと開墾、連日の農場での労働など、特に農耕については多くの時間を使っていることがわかる。(5)については縦割りの部屋ごとに料理などを担当したことからも、2学年ではあつたが上下級生で共にあつたと思われる。

このように、初等部の疎開は独自に取り組まれたものではあつたが、大きくは都や国がたてた方針に沿つたものであつたことがうかがえる。

那須への疎開開始から2週間ほどたつた9月25日に、南沢では父母会が開催され、南沢、那須のそれぞれの疎開寮について様子が父母へ伝えられた。那須の様子については、佐藤の描いたスケッチ8枚も会場に貼られたという⁸⁷。

2.8.3 音楽会(1944年10月23日)

国民学校での疎開でも宿舍で夜などに、劇や歌を発表し合う学芸会などのお楽しみ会が開かれたが、初等部も対外的な音楽会を開催した。9月10日に那須へ疎開してから1か月余り後の10月23日、初等部の児童がお世話になっている馬事研究所で音楽会を開催した。この音楽会は馬事研究所やこの土地に住む農家の方たちを慰問するために開かれ⁸⁸、地元の子どもも40人ほど聴きにきた。児童が家族にプログラムを書き送っている。

「一 国民儀れい

二 かりの歌 同じあじや

三 ヴァイオリン二重奏

ドイツのガボット

日本の子守歌

- 四 深田、田部のたのしき農夫
- 五 トーイシンホニー
- 六 四十人位の和音
- 七 外山先生のヴァイオリン 山本先生がピアノ
- 八 平井先生の歌神兵その他二曲
- 九 全員のミリタリーマーチぼくはがらがら
- 十 来てくださった人たちもみなたって愛国行進曲を歌った⁸⁹。

音楽会開催のいきさつについては、佐藤が回想で「東さんの関係しておられる種馬所関係者の熱望にこたえて「音楽会」を催した」と書いている⁹⁰。プログラムにある「先生」たちは普段初等部で音楽指導をしていた教師で、この音楽会のために那須を訪れたと思われる。那須への疎開では、「校具」も疎開させており、その中には楽器も含まれたので、こうした合奏も可能だった。ちなみにピアノは、宿舍の食堂に1台置いてあったという⁹¹。

2.8.4 農作業を中心とした勤労奉仕（1944年9～11月）

前述した通り、学童集団疎開において国は、その土地の環境に合った勤労を重視していた。また、「帝都学童集団疎開実施細目」の「第5 食料其ノ他生活必需物資、学用品ノ調達」には「7 疎开学童ヲシテ極力食糧、燃料等ノ自給生産ニ当タラシムルコト」という項目があり、初等部の疎開もこれを実行、主に農作業に従事した。宿舍周辺の庭の開墾に始まり、馬事研究所の農場、種馬所の農場、そして那須農場での草取りを中心とした農作業を行い、時には近隣の農家から応援を頼まれると勤労奉仕へ行っていた。その労働があったからか、たとえば馬事研究所や種馬所からは貴重なたんばく源となる「さくら肉」や「豚の頭」などを提供されることがあった。また、那須農場では労働の際の昼食や、野菜の提供が日常的に行われていた。開始の年月日は定かではないが、ある時から農場から毎日牛乳をもらっていた⁹²。牛乳を取りに行く当番が2人ずつ出て、18リットル入る大きな缶をリュックで背負って農場へ通ったという⁹³。

所在県からの配給があるとはいえ⁹⁴、それだけでは食料は十分ではなく、自給自足と共に、こうした近隣からの食糧援助は欠かせないものだった。一般の国民学校の疎開においても、農業の盛んな土地へ疎開をした児童は、2～3人ずつが時々現地の農家を訪れ、そこで労働し、食事の提供を受けるケースはあったが⁹⁵、初等部の場合はそれを上記の施設が担っていたともいえるだろう。ただ、那須農場での昼食については、初等部児童の人数が多いことが原因で、10月16日からは弁当持参で行くことになった。野菜は継続して提供を受けており、一人ひとりリュックを背負って行ったという⁹⁶。農場での労働は、44年は11月8日が最終日だった⁹⁷。同年9月13日からのおよそ2か月間の労働であった。農場からは野菜だけでなく、11月には子豚も1頭提供されている。小屋も男子部生徒によって宿舍の庭の隅に建てられ、松風と名付けられて飼われた。丸々太らせて食べるとの予定だったが、人間の食糧事情さえ悪い中、やせていたという⁹⁸。

なお、1944年11月11日に前文部大臣岡部長景が那須農場を視察し、その帰りに那須疎開寮も訪れた。同日の記録には「十三日には二宮文部大臣がいらっしゃることになる。中も外もきれいにしておきます。」との記述があるが⁹⁹、二宮文相が訪れた記録はない。

2.8.5 南沢疎開寮の閉鎖（1944年11～12月）

ここでは、東京・南沢疎開寮の閉寮について、その経緯を追う。この閉寮によって、のちに4年も那須へ疎開するようになったためである。

1944年11月24日、東京都下ではこの日の昼にB29による大規模な空襲が発生した。米軍の標的は北多摩郡武蔵野町（現武蔵野市）の中島飛行機武蔵製作所であったが、上空の雲が多かったため、第一目標物への攻撃が足りないとの認識から、12月上旬にかけて複数回空襲を行った¹⁰⁰。11月24日の空襲によって、初等部食堂のガラスが3枚割れた。これは、久留米村に落とされた数発の爆弾の、爆風による被害だった。帰宅の際、児童は最寄の駅まで行ったが、沿線にも爆弾が落ちたため、電車が不通となり、その日は全員が寮に泊まることとなった。この日は金曜日だったが、土曜も帰宅せず、日曜まで寮にとどまった。またその後も南沢疎開寮にいた児童は、毎週末の帰宅をとりや

め、寮で過ごすようになる¹⁰¹。

その後も度重なる空襲により、疎開受入地ではあったが南沢は危険となり、1～4年の那須疎開も検討され始める。初等部は12月には馬事研究所に追加で建物を借りられないか交渉したが、断られた¹⁰²。11月27日、30日、12月3日と空襲があり¹⁰³、南沢の危険度はいよいよ高まり、南沢疎開寮は閉寮する。記録がないため正確な閉寮月日は定かではないが、回想録によれば1944年11月末か12月であったという¹⁰⁴。少なくとも2学期中には閉寮したようである。

2.8.6 越冬の準備 (1944年11～12月)

東京の学校から、東北各地へ疎開した児童たちにとって、慣れない北国の冬はひじょうに厳しいものだった。たとえば疎開1年目の冬、1945年1～2月の宮城県の平均気温は過去65年のうちで最も低く、零下10度以下になる日が多かった¹⁰⁵。初等部が疎開していたのは栃木県那須郡であったが、宿舎でも、1944年11月下旬には零下3度に、12月には初雪が降り、年明け45年1月18日には零下8度半だったとの児童の記録がある¹⁰⁶。暖房器具は、各室に火鉢が1個あったという¹⁰⁷。

那須疎開寮では、越冬に向けて、食料の保存が行われた。1944年12月17日、近隣の百姓が疎開学級へ白菜を売りに来て、初等部は「一貫匁一円三十銭」の白菜を「五十貫匁」購入した。一軒家宿舎の押し入れに集めてきた松葉を詰め、その中に一つずつ新聞紙にくるんだ白菜を保存した¹⁰⁸。他にも、ごぼう、人参各約1500本、大根500本、里いも40俵ほどを土の中に貯蔵したとの記録がある¹⁰⁹。こうした方法は、東北出身の教師であった阿部徳右衛門の経験と知識によるもので¹¹⁰、初等部の疎開は阿部が主任だったことで越冬についての準備も適切にできた部分は大きい。

自由学園は創立者である羽仁もと子・吉一のキリスト教信仰を土台として設立された。夫妻は宗教教育には注意深くあたったが¹¹¹、毎朝の礼拝やクリスマスは平時より大事にしていた。44年の疎開先の初等部児童もクリスマスを祝った。ある児童は当時の親への手紙にクリスマスの様子を次のように書いている。

「十二月二十五日はクリスマスでよいおくりものをしやうと先生がおっしゃったので室ごとで先生のおせんたくをしてあげたり、つぎものや机みがきやいろいろ室でやった。一室の僕たちは四室の人たちといっしょに材料運搬に行った。パン五はこと机やいすを沢山大八車二台につんで来た。重かったが一生懸命にひいてかへって来ました。その夜はとても大ごちさうでした。」¹¹²。

教師からの提案により、物ではなく労働を互いに贈りあったことがわかる。

1944年の年末、12月28～31日には那須農場員協力のもと、配給のもち米約5升を使って餅つきをし¹¹³、年明け3が日はその餅を使って朝は雑煮（豚肉入り）を食べた¹¹⁴。元旦には農場の男子部生徒が来て、児童と一緒に百人一首や羽根つきをして遊んでくれた。初等部の疎開では、主に女子部の高等科2年の生徒がその生活を支えていたが、農場へ疎開していた男子部生徒もこうして子どもたちにかかわっていたことがわかる。

2.8.7 4年生が加わる (1945年1～2月)

年が明けて1945年1月12日、国は学童集団疎開の期間を一年間延期し1946年3月までとする閣議決定をした。その中で、国民学校では4月から3年になる児童も疎開対象とすることが明記された。初等部の東京の南沢疎開寮は前述のように閉寮し、1～3年は地域ごとに近所の児童数人ずつが集まり、そこへ教師が巡回指導をする形がとられるようになった¹¹⁵。44年度の4年22名は1月15日に那須疎開寮へ入寮した。44年9月に来ていた5,6年62名と合わせて、那須にはこの時期、84名がいたことになる。4年には教員の村上せつ、女子部高等科2年1名が同行。荷物の中には、鮭缶400個とバターがバケツ3杯分入っていた¹¹⁶。

3学年での生活が始まってすぐに、風邪がまん延した。1月22日の記録では、50名の病人、そのうち39度以上の発熱がある児童が20名以上、40度以上も3名いた。肺炎の一步手前で帰京した人（児童か大人か不明）が2名いた。医者には西那須野駅のほうにいたため、病人が多く危険が増したある夜には高等科生徒2人が雪の中、往診を頼みに出向いたが、車が出ないとのことで断られている¹¹⁷。その後、幸いにも全員命に別状はなく、2月4日には病気のために寝ている児童は4名になった¹¹⁸。

その後徐々に回復した子どもが多くなり、2月1日には前年12月23日の皇太子の誕生日に皇后から疎開学童と教職員へ、御歌と共に贈られた菓子を皆で食べた¹¹⁹。なお、皇后からの御歌「つぎの世をせおふべき身ぞたくましく

たゞしくのびよさとにうつりて」は、食堂の黒板に書かれており、毎朝奉唱していた¹²⁰。

多くの児童が健康を取り戻したからだろうか。2月5日には、主任教師の阿部が竹でスケートを6足、そり5台を作り、皆で雪のスロープを庭につくって遊んだ¹²¹。また2月頃からは引率に教師の渡辺博子、入江ミナエが加わった¹²²。

2.8.8 疎開地にも迫る空襲と6年生の帰京（1945年2月～3月10日）

年明けから各主要都市での空襲は激しさを増していたが、初等部が疎開していた那須でも、それは他人事ではなくなりつつあった。前年1944年11月1日にも空襲警報が鳴った記録があるが¹²³、頻繁になったのは翌年からであった。45年2月10日の空襲警報発令時には、初めて宿舍のガラスがガタガタと揺れ、爆風もきたという¹²⁴。同年2月23日には、文部省が都長官へ「集団疎開学童ノ防衛施設強化ニ関スル件」を通牒し、疎開先でも防空態勢を整え、必要であれば防空壕等も整備するようとした。疎開地にも空襲の危険が迫っていたことがわかる¹²⁵。

そうした中、東京都は、上級学校受験の6年生疎開児童の帰京について、輸送期間を1945年2月21日～3月10日と定めた¹²⁶。都内上級学校試験日（3月20日）の10日前までに帰京させるという計画だった。「帝都学童集団疎開実施細目」の「第4 疎開先ニ於ケル教育、養護」では「5 集団疎開学童ハ都内上級学校ヘノ進学ヲ認ムルト共ニ本人ノ希望ニ依リ地元ノ収容力ヲ勘案シテ地元ニ於ケル進学ヲモ認ムルコト」という事項があったが、ほとんどの6年生はこの時期に帰京した¹²⁷。

自由学園女子部、男子部は共に各種学校ではあったが、1945年の試験は女子部3月20日、男子部22日の予定だったとの記録があり¹²⁸、東京都の他の高等女学校、中学校とほぼ同じ日程だったようである。2月8日の記録には「二月二十日から三月十日の間に帰るという予定です」との記述があり¹²⁹、このころには都からの通達が伝わっていたと考えられる。その後、初等部の6年生疎開児童は全員、3月10日に帰京することが決まった¹³⁰。前日の夜には配給の小豆を使った赤飯を炊き、10日の帰京の日には、6年生30人に2食分の弁当、おみやげのたくあん（児童で漬けたもの）を持たせ、熱い牛乳を飲ませてから送り出したという¹³¹。そして帰京した赤羽のプラットホームは、前夜の空襲で焼き出された多くの人たちでごったがえしていた¹³²。初等部の6年生は10日に帰京したため、未明の空襲で犠牲になった児童はいなかったが、それ以前に帰京していた他の国民学校の児童の中には、この空襲で犠牲になった子どもも多数いた¹³³。

結果的にこの年は上級学校の入試は中止となり、一般の受験生たちは書類の提出だけで志望校へ無試験で合格した¹³⁴。自由学園では試験の有無は不明だが、面接が行われていた記録はある¹³⁵。

1945年4月10日、新4年生28名が那須疎開寮へ入寮した¹³⁶。この時、きょうだいのいた2年生児童も一緒に那須へ疎開している¹³⁷。また、やはり那須疎開寮に兄がいた新1年生男児1名が、近隣の農家へ母子で疎開していたことから、那須疎開寮へ日中通うことになる¹³⁸。他に地元の子どもも2～3人通っていたという¹³⁹。

2.8.9 悪化する食糧事情

次に、食糧事情について見てみる。配給物資は「帝都学童集団疎開実施細目」によれば「主要食糧、調味食品等ノ配給統制物資ハ疎開計画ノ進捗ニ即応シテ東京都分ヨリ受入県分ニ割当転換ヲ為シ、集団疎開学童用トシテ指定シ受入県ニ割当ツルコト」となっていたが、1945年に入り、食糧事情は徐々に悪化。同年5月には学童疎開向けの特配は中止。主食は減配されるようになる。さらに同年7月1日からはさらに1割減配になり、各地疎開先では栄養失調、その前段階である栄養不良症になる児童が多かった¹⁴⁰。初等部の疎開の食糧事情はどうだったのであろうか。ここで、記録のある部分を見てみよう（出典：前掲『あしおと』）。

【1944年】

9月22日 夜：ライスカレー（桜肉入り）

9月23日 （誕生日会）夜：赤飯、里芋としいたけの煮物、おから

9月25日 昼：茸とずいきの煮つけ、大根葉と鮭缶のいためもの、大根の千六本 夜：ごはん、ずいきと茸の煮物、大根の千六本、お菜とシャケのからいり

9月27日 夜：野菜汁（かぼちゃ、ネギ、里芋）、ずいきのごまあえ、大根葉のおひたし

9月28日 夜：きゅうりもみ、ずいきと豆のみそあえ、じゃが芋のちゃきんしぼり（栗入り）

- 10月3日 おやつ：梨、いり大豆
 11月11日 昼：パン、しちゅう、豆とねぎのみそあえ、さつま芋
 11月18日 (馬市を見に遠足) 昼：(弁当) サンドイッチ、ふかし芋、お豆 夜：大根のみそ汁、里芋クリーム煮
 12月28日 昼：うのはないり、お菜の割干し加え
 12月30日 夜：パン、きぬかつぎ、白菜の塩もみ、大根のあんかけ

【1945年】

- 1月1日 朝：かずのこ、雑煮
 1月2日 朝：雑煮
 1月3日 朝：雑煮 おやつ：(東さん宅) プディング、パウンドケーキ、しいの実、爆弾菓子、みかん、紅茶
 夜：三食御飯、里芋・大根の煮つけ
 1月5日 夜：里芋のあんかけ、白菜の塩もみ、スープ、りんご、お汁
 2月 (誕生日会) 夜：ちらしずし、のりまきずし、里芋の含め煮、おすまし(うどん、人参)、おまんじゅう(さつま芋餡)、みかん
 3月3日 (ひな祭り) 夜：五色御飯(錦糸卵、金平牛蒡、紅いうの花いり、白菜の青いところとからいりしたもの、青のり)、つくね煮(鮭缶入り)、大根と干し柿の甘酢、豆腐のお清汁、桜餅、甘酒、あられ、寒天で作ったひし餅、はまぐりずし(東さんのお家から)
 3月4日 昼：白菜巻き(里芋、鮭缶)、大根の煮つけ、羊かん(小豆、さつま芋)
 3月9日 (6年帰京前夜) 夜：赤飯(配給の小豆)、おすまし、里芋の含め煮、精進揚げ(人参二つ、さつま芋二つ、大豆、ネギと小魚)、大根おろし、小豆餡のおまんじゅう、かきもちあられ、おそば(東さんのお家からいただく)
 6月14日 夜：からし菜の漬物、かぶの塩もみ、キャベツと鯖の煮つけ、(病人用：スープ、かぶ、玉ねぎ、バター、さやえんどう)
 6月20日 夜：蕎麦と高野豆腐の煮つけ、大豆御飯、漬物

献立は女子部生徒が立て、料理は女子の部屋が交代で、女子部生徒1~2名と一緒に作った。女子部生徒たちは、限られた材料であっても、子どもたちを喜ばせたいと、特に行事食などは工夫を重ねていたことがうかがえる¹⁴¹。材料は配給物資と農場からの野菜、宿舍の庭を開墾して作った野菜、農家から購入した野菜、近隣で収穫した苧や山菜、馬事研究所から提供された馬肉や豚の頭などが充てられた。また、記録からは、保護者であり種馬所所長であった東の家から提供された料理もあったことがわかる。しかし、特に45年2、3月になると食糧事情は悪くなり、米の量が減り、その分大豆の量が増えた¹⁴²。大豆の食べ方のバリエーションはそれほどなく、教師が困って豆腐屋に頼んで、豆腐やおからと交換してもらったこともあった¹⁴³。正確な年月日は定かではないが、児童の回想では、大豆ご飯は「黄色い大豆のつなぎに御飯が少しまじる」もので、そのほかにも芋の雑炊、苗を取った後の種芋まで食べたという¹⁴⁴。食糧事情が悪くなると同時に、徐々に子どもたちに吹き出物や下痢の症状が出始める。これは、栄養失調の症状だった¹⁴⁵。

2.8.10 戦況悪化と終戦(1945年4~8月)

厳しい冬が過ぎ、春を迎える頃から、初等部の疎開学寮ではふたたび食糧自給のための作業が始まった。徐々に春の足音が聞こえていたのだろうか。1945年4月30日には6年と阿部で山菜取りをし、ワラビ、ぜんまい、つくしを8.4キロ収穫した。また、このころから庭の畑の開墾が始まっている¹⁴⁶。7月13日のある児童の手紙には「このごろは毎日農場の除草に行ったり研究所の除草に行ってみます」¹⁴⁷との記述があり、年度が明けてからも前年度に引き続きこうした勤労奉仕が継続されていたことがわかる。7月16日にはさつま芋の苗、里芋、南瓜の苗を寮の庭に植えている¹⁴⁸。8月26日には南瓜、キュウリ(200本以上)、里芋、トマト、ナスを収穫しており¹⁴⁹、これらの苗か種を春~初夏にかけて植えていたと考えられる。

1945年8月15日に日本は敗戦。この日の朝、昼から大事な放送があることを告げられ、児童たちは午前うちに掃除をし、着替えて昼を待った。玉音放送を聞いた後、午後はさつま芋畑の除草をしている。ある児童は「放送が一時少し前におはってお食事が少しおくれた。頂いてゐる時もむねにつまるやうな思ひだったが、皆これからの生活をほんとうにしっかりやらなければと考えてゐた」と日記に書いている¹⁵⁰。

戦争が終わり、翌8月16日には文部省より、疎开学童を「原則として親許へ」帰すという報道が新聞にてされる。しかし、輸送等多くの手続きが必要との理由から、東京都は8月17日に「学寮教育を継続する」と新聞発表した¹⁵¹。

那須の初等部児童たちも、いつ東京に帰れるのかと落ち着かない日々を送っていたが、終戦1週間後、主事の佐藤が那須を訪れ、東京は混乱しているため、まだしばらくは那須にいたほうが良いと伝え、羽仁吉一からの手紙を村上へ渡した。そこにも、まだ那須にとどまるようにと書かれていた¹⁵²。

2.8.11 帰京（1945年10月）

その後、最終的に都は1945年10月17日より60本の臨時列車を出し、疎开学童を11月13日までには帰京させることを決めた¹⁵³。初等部の帰京日程がいつ決まったのかは不明だが、ある保護者から児童への10月3日の手紙の中に、「十月十日南沢の初等部の校舎で父母会があり、その時那須からひきあげてくるお話もあるさうだ。十月の中頃から二十日くらゐの間に帰京できるのではないかと考えて居ます。」との記述があり¹⁵⁴、都の輸送期間内に帰京が計画されていたことがうかがえる。その後、他の児童からの親への手紙（10月14日）の中に「いよいよ帰る日が近くなってきのふ梶浦さんのお母さんがいらっしゃっておしへて下さってそれを阿部先生が今日おっしゃって二十五日になりました。あと十一日ぐらゐです。とてもうれしいでした。」¹⁵⁵と書かれており、帰京日が10月25日と決まったことがわかる。

終戦から10月までの間、初等部の児童と教員は帰京の準備をしつつ、疎開寮での生活を続けた。終戦翌日の16日からは、水泳が実施されている。場所は不明だが、その後も20、21、22日と水泳をしている。8月25日には午前中1時間を算数、2、3時間目に地理、午後は新聞の中から50題を出す漢字の書き取りをしている。また、午後にピアノを習う日もあった¹⁵⁶。宿舎の庭や農場での労働も継続しており、前述のように多くの野菜も収穫している。そして、戦後の疎開寮での食糧事情について、当時児童だった卒業生は次のように回想している。「九月に入ると急に食事の量が増えてきた。久しぶりに満腹の日々だった。今にして思えば冬に備えて貯蔵してあった食糧がいなくなったので使いはじめたためだと思う。」¹⁵⁷。正確な帰京日が決まったのは前述したように10月に入ってからのようだが、2度目の越冬はなさそうだとすることで、食事の量も増やせたのかもしれない。そして10月25日、予定通り全員が帰京した。保護者である梶浦浩二郎の日記には、当時について次の記述がある（梶浦は那須へ疎開していた妻子を迎えに、前日より那須入りしていた）。

「十月二十五日木曜

珍しき快晴。疎开学級生徒■こととして朝八時前■へ向ふ。一人の落伍者もなく皆帰京出来るのは先生方の御苦勞の賜なり。次に大急ぎに疎開荷物を貨車にて発送し帰京の途につく」¹⁵⁸。

1944年夏から1年以上続いた疎開生活中に命を落とした児童はいなかったが、帰京後、肺炎で男子児童が1名亡くなっている¹⁵⁹。

3. いくつかの考察

3.1 疎開受入地区の私立学校

記録をもとに自由学園初等部の疎開について明らかにしてきたが、そこからは、いくつかの特徴が見える。まず一つは、初等部がそもそも疎開対象地ではなく、疎開受入地に位置していたことである。区部にあった私立小学校は、独自の施設へ疎開した学校もあったが、区割り当ての地域へ疎開した学校もあった。いずれにせよどちらにするかを選択する余地があったが、初等部はそもそも区部ではなく、そうした割り当て地区はないため、集団疎開をする場合は自前で場所を選定する必要があった。

都下の認定学校の中にはたとえば武蔵野学園のように、初等部と同様疎開対象地域ではなかったものの、所在地であった東京都北多摩郡武蔵野町に中島飛行機の工場があり、そこが空襲目標地となったため、学校の近くに爆弾が

落ちるようになった学校もあった。それにともなって武蔵野学園では退学する児童が増え、学校経営に影響が出た¹⁶⁰。区部から通う児童が多かった初等部はその安全面を重視し、7月には集団疎開を決定しているが、結果的にそれは、児童数の減少を防ぐことになった可能性もある。

米田俊彦が指摘している通り¹⁶¹、戦時中の私立学校の集団疎開は経営基盤維持にも深くかかわっており、当時の児童数がどのように推移していたかは学費徴収の面からも重要である。つまり、国が当初強く推進しようとしていた縁故疎開は、それに応じて私立小学校の児童が疎開し、疎開先の国民学校へ転校してしまうと児童数が減り、万が一全員が縁故疎開を選択した場合は学校が存続不可能になる危険性もあった¹⁶²。現に慶應義塾幼稚舎では縁故疎開が推奨されていた1944年春には児童数が減り始めており、クラス数の縮小、それに伴う教職員の人員整理が行われ、45年春にも再び人員整理が実施されている¹⁶³。初等部は、44年9月以前にすでに縁故疎開をしていた児童はいたが、再び初等部へ戻ってきている児童もあり、全員が疎開先の国民学校へ転校していたかは定かではない。また、国公立の国民学校の集団疎開が本格化する頃には、初等部へ転入学して来る児童が増える。その結果、少なくとも南沢疎開寮閉寮までは、当時の定員180名に近い人数が在籍していた可能性が高い。1945年10月25日、那須からの帰京時は4～6年生の児童が合わせて約80名程度、東京で巡回指導に参加していた1～3年生の児童数は不明である。

現在自由学園に残されている疎開関連の記録の中には、学費収入、経営等に関する記述は発見できていない。一方、戦後、1945年11月頃から南沢で再開された初等部へは、集団以外で疎開していた児童も徐々に戻ったとの回想があること¹⁶⁴、学校経営としては、女子部、男子部も小規模校であるがゆえに、一体的に行っていたと考えられることから、初等部のみ経営危機が起きる可能性も小さいかと思われる。ただ、これらを明らかにするには、学校全体の当時の経営状況等も併せ、さらなる調査が必要である。

3.2 保護者、他部の協力

次に、保護者の協力が大きかったことも特徴である。初等部は前述のような理由から、疎開先、荷物の輸送等、自分たちで決めなければいけないことが多数あり、それらは保護者による協力によって実現した部分が多い。疎開先の馬事研究所官舎は、当時の保護者が種馬所所長（種場所は馬事研究所と国道を隔てて隣接していた）だったことで借上げが実現したという経緯がある。荷物等の輸送に関しては、鉄道監であった保護者の尽力があった。

また、引率人員として学内の女子部高等科生徒が複数参加したことも特徴として挙げられる。これは南沢疎開寮、那須疎開寮いずれにも共通しているが、高等科1,2年生の生徒が児童の面倒を見た。初等部の教師以外に、こうした女子生徒が4～5人常駐した。那須疎開寮のみで見ても、女子部生徒は2度の交代を経て、合計11名がかかわったことがわかっている¹⁶⁵。那須農場で食糧増産のための労働をしていた男子部生徒も、豚小屋づくり、餅つき、45年は正月に訪問して一緒に遊ぶ、防空壕掘りなど、さまざまな面で初等部の疎開に協力した。日頃から学内の行事は共同で行うなどの実践があったが、小規模校ならではの家族的運営がここでも生かされたとも考えられる。

3.3 学校農場の存在

疎開先宿舎から約4キロの位置に学校農場である那須農場があったことも特徴の一つである。1941年開場のこの農場は、主に男子の教育の場として想定されていたが、戦時中は食糧増産の場となり、配給だけでは足りない初等部の疎開児童の食糧確保に貢献した。初等部児童が勤労奉仕として農作業をしに頻繁に通い、作業後には昼食を提供したり、野菜を持たせたりした。豚を1頭寄付し、ある時期からは毎日牛乳を提供していた。食糧事情の悪い中で農場が大きな役割を果たしたと言えるだろう。

また、食糧事情が重視された当時、学園がこの農場を所有していたこと、初等部の疎開先がその農場の近くであったことで、1944年8月から9月上旬にかけて他の国民学校から子どもを初等部へ転入させた保護者もいたことから、この農場の存在が初等部の児童数維持にも影響を与えていたと考えられる。

3.4 再疎開の有無

第二次大戦下での学童集団疎開では、1945年の3月以降、最初の疎開先から別の疎開先へと再疎開した学校が少な

くない。これは、たとえば温泉街の旅館等に疎開していた学校はその場所に傷痍軍人が療養のためにくるという理由で、移動を余儀なくされている。また、軍需工場が疎開を始めたため、その工員宿舎にするために学童が再疎開させられるケースも多発した¹⁶⁶。つまり、都市部への空襲が激しさを増し、重要な工場等が疎開をしはじめ、すでにそこに疎開していた児童たちは、周縁部へ押し出されるような形で再疎開を余儀なくされたのだ。他にも、都市の近隣県は空襲の危険性が高まり、より安全な地域への再疎開がなされるケースもあった。

私立学校でも、例えば青山学院緑岡初等学校は1944年8月に伊豆・湯ヶ島へ疎開したが（学校所在地である渋谷区の都からの割り当てが静岡県だった）、45年6月に渋谷区の再疎開地、青森・弘前へ移動。しかし弘前も危険となり、7月には弘前近郊の村へ再々疎開し、そこで終戦を迎えている¹⁶⁷。立教女学院小学校は杉並区管轄下に入り、近隣の国民学校と同一の方法をとる選択をし、44年8月に長野県小県郡へ疎開。45年4月には同県内南佐久郡へ再疎開している¹⁶⁸。慶應義塾幼稚舎は44年8月に伊豆・修善寺へ疎開。相模湾への米軍上陸への懸念から45年6月、青森県西津軽郡へ再疎開している¹⁶⁹。成城学園初等学校は44年9月に伊豆・長岡へ第一次集団疎開。翌45年5月には秋田県平賀郡へ第二次集団疎開を実施し、同年7月に伊豆・長岡組が新潟県へ再疎開している¹⁷⁰。このように、いくつかの私立小学校を見ただけでも、再疎開をしている学校は少なくない。主に設置区の管轄下においての疎開を選択した学校に再疎開したところが多くなっているようにも感じられるが、詳細な分析はできていない。

初等部については、前述の理由から独自に疎開場所を設置していたこと、また、特に1945年は那須においても空襲が頻発してはいたものの、結果的に再疎開は実施しないですんだ。同地区には東京都本郷区の千駄木国民学校児童が6つの寺に分かれて集団疎開を実施していたが¹⁷¹、再疎開は実施していない模様だ。この土地を疎開先として選んだことも、再疎開をしなくて済んだ理由の一つだろう。

4. 今後の課題

自由学園初等部の疎開について概観してきたが、今回扱っていない事項については今後もさらなる調査・分析が必要である。たとえば本研究では、資料の中の主に事実の記録（日記、手紙等）を調査対象とし、それらを時系列に整理し、疎開の全体像の把握を試みた。よって、実際の疎開体験時、また回想時の当事者たちの感想等にはほとんど触れていない。これは、当時の手紙が、投函前に教師の目を通っており、子どもたちの本心が表れているものとは言い切れないという難しさがあることも一因である¹⁷²。しかし、そのような前提があるとしても、やはりこれらの記録を中心とした質的調査もなされなければ、当時の疎開がどのようなものであったのかを明らかにすることにはならない。調査方法の検討も含め、今後の課題の一つかもしれない。

また、戦時中の自由学園の経済については、まだ未解明の部分が多い。私立学校の集団疎開が、学校経営と密接に関連していることから、この部分のさらなる調査が必要と考える。

私立小学校の学童疎開については、未解明な部分が多い。ただ今回、数は少ないとはいえ、先行研究と自由学園の疎開の実態を比較することで、私立学校はたとえば、学校自体がどの場所に位置したか、学校規模がどの程度であったか、保護者にどのような人物がいたか、などによって疎開の様相がかなり異なってくるが見えてきた。今後、各学校における資料調査、研究が進み、数が増えることでそれらのより詳細な比較検討が可能となり、なおかつ、国民学校と私立学校（認定校）の比較検討にもつながるだろう。

注

- ¹ 1941年2月時点での日本全国の私立小学校は95校、そのうち東京府内は35校だった（「東京私立初等学校協会」70周年記念事業実行委員会編『東京私立初等学校協会の歩み—結成70周年—』東京私立初等学校協会、62頁）。
- ² 自治体史への記載のみならず、たとえば豊島区では青木哲夫による、資料に基づいた学童疎開の詳細な調査結果を経年に渡って『生活と文化』[豊島区立郷土資料館研究紀要第21号〜]へ掲載している。
- ³ 『北海道大学教育学部紀要』第51号、1988年。
- ⁴ 「読者の方へ」全国疎開学童連絡協議会編『学童疎開の記録 1』大空社、1994年。
- ⁵ 佐藤秀夫「総論 学童疎開」『学童疎開の記録 1』大空社、1995年。

- 6 柄越祥子「慶應義塾幼稚舎における学童集団疎開に関する一考察—幼稚舎緊急対策後援会との関係から—」(初出『近代日本研究』第23巻、2007年。慶應義塾幼稚舎「疎開学園の記録」編集委員会編『慶應義塾幼稚舎疎開学園の記録 上』慶應義塾幼稚舎、2015年収)。
- 7 柄越祥子「慶應義塾幼稚舎における学童疎開の展開 慶應技術幼稚舎東京本部を視点として」(初出『近代日本研究』第26巻、2010年、前掲編集委員会編『慶應義塾幼稚舎疎開学園の記録 上』収)。
- 8 前掲、柄越祥子「慶應義塾幼稚舎における学童集団疎開に関する一考察—幼稚舎緊急対策後援会との関係から—」、218頁。
- 9 中村早苗「青山学院緑岡中等学校の学童集団疎開」青山学院大学教育学会紀要『教育研究』第58号、2014年。
- 10 たとえば『成蹊学園百年史』(学校法人成蹊学園、2015年)、『成城学園九十年』(『成城学園九十年』編集小委員会、2008年)、『日本女子大学学園史二』(日本女子大学学園史二編纂委員会、1968年)、『東洋英和女学院120年史』(学校法人東洋英和女学院120年史編纂委員会、2005年)、『玉川学園五十年史』(玉川学園五十年史編纂委員会、1980年)などの学校史には学童疎開の記述がある。また、立教女学院小学校は当時疎開の責任者だった教諭のまとめた「440日を耐えて—学童集団疎開の記録—」(稲葉一彦、『紀要』No. 4、立教女学院小学校中学校高等学校、1975年)などもある。当時の東京都の私立小学校全体の動きについては「日小連創立35年の歴史を語る」(日本私立小学校連合会『日本私立小学校連合会のあゆみ—創立35周年記念—』1977年)や「後世に語り継ぐべきこと」(同『日本私立小学校連合会—結成50年のあゆみ—』1992年)などに詳しい。しかしこれらはいずれも記録的要素が強く、研究・分析が待たれるものである。
- 11 女子部も1934年に南沢へ移転した。
- 12 生活団は全国各地にあり、東京は豊島区や淀橋区にあった。幼児生活団について詳しくは以下参照。菅原然子「幼児生活団の設立経緯」『生活大学研究』vol. 1、2015年。
- 13 『昭和十二年度 学校日誌』10月15日記述、自由学園資料室蔵。
- 14 『初等部学校日誌』抄録 昭和17年—32年』自由学園資料室蔵。
- 15 以上、戦中の記述については主に『初等部学校日誌』より。
- 16 菅原然子「国民学校におけるカリキュラム実践モデルとなった自由学園初等部」(『生活大学研究』vol. 2、自由学園最高学部、2016年)。また、自由学園全体の戦時中の動きについては、村上民「戦時下における自由学園の教育 (1)各種学校・自由学園の存続問題を中心に」(『生活大学研究』vol. 6、自由学園最高学部、2021年)参照。
- 17 国の疎開政策についての主な参考資料は以下。佐藤秀夫「総論 学童疎開」、青木哲夫「疎開させる側の論理」(以上、前掲、『学童疎開の記録 1』)、前掲、逸見勝亮『学童集団疎開史』、前掲、一條三子『学童集団疎開』。
- 18 前掲、「日誌」1944年7月1日記述。イニシャルは、原文は個人名。
- 19 同前、「日誌」1944年7月12日記述。
- 20 前掲、一條三子『学童集団疎開』、64頁。
- 21 同前、「日誌」1944年7月14日記述。
- 22 現に、村内にあった都立久留米村学園は先の東京都独自の疎開政策の中で荒川区の疎開先に割り当てられ、1944年5~8月には「都立久留米村疎開学園」として荒川区から218名の学童が疎開した。また、全国で集団疎開が実施された後は、北多摩郡は赤坂区の割当地となり、久留米村小山の大円寺には青山国民学校の学童27名が、成美荘には東京第二師範の80名がそれぞれ疎開した(東久留米市教育委員会『東久留米の近代史 明治・大正・昭和前期』2012年、142頁、前掲『学童疎開の記録 1』、409頁)。
- 23 羽仁もと子は当時、以下のように書いている。「私どもの南澤の校舎は疎開受入区域になってみますが、初等部は市内から通学する子供が大多数なので、一年から四年までを南澤の寮舎に、五年六年は那須にある馬事研究所の宿舎を貸していただいて疎開させました。」(羽仁もと子「今は子供を強くする秋です(学童疎開の使命)」『婦人之友』1944年10月号、2頁)。
- 24 なお、全国的には疎開に使われた施設の割合は以下のものであった(1944年9月24日時点)。旅館1949施設(全体の53%)、寺院1451施設(同約40%)、その他250(同7%)であり、初等部のような自前の校内寮や、研究所の官舎は「その他」に分類されるため、少数派であったと思われる(前掲、一條三子『学童集団疎開』、80頁)。
- 25 残留の場合も縁故疎開希望と同様の様式にてその理由を記し、提出が求められた(同前、65頁)。
- 26 東京都『資料 東京都の学童疎開』東京都、1996年、272頁。
- 27 前掲、「日録」1944年7月21日記述。
- 28 同前、1944年7月22日記述。
- 29 初等部の「疎開書類」の記録は見つかっていないが、前掲『資料 東京都の学童疎開』58頁には、「32 白百合戦時疎開学園設置認可に関する件」という書類が掲載されており、認定校が疎開学園を設置する際に提出していた書面の一例として参照できる。
- 30 前掲、「日録」1944年7月23日記述。

- ³¹ 前掲、「日誌」1944年8月21日記述。
- ³² 同前、1944年7月18日記述。
- ³³ 馬事研究所とは、正式名を農林省馬事研究所といい、1941年に千本松地内（現・畜産草地研究所一帯）に開設された、馬の改良・繁殖・育成・調教を科学的に研究する国の機関。農林省栃木種馬所（初等部保護者の東が当時所長を務めていた機関）の隣接地にあった。戦後の行政組織再編により、1946年2月1日に廃止となった（西那須野町史編さん委員会編『西那須野百科事典』西那須野町、2004年、256頁）。
- ³⁴ 佐藤瑞彦「一瞬の夢！」前掲、『あしおと』、12頁。
- ³⁵ 前掲、「日録」1944年8月14日記述。
- ³⁶ 初等部の疎開では、学徒動員の一環として、高1、高2の学年の女子部生徒が児童の世話係（寮母）を受け持った。
- ³⁷ 当時自由学園那須農場長であった安田文信の記録によれば、1944年8月18日「遂に昼すぎ自動車にて帰場。羽仁先生にお会いする。午前、佐藤先生、落合先生も来場。羽仁先生と共に馬事研究所に初等部疎開に関して打ち合わせにゆかれる。」（安田文信『南沢我が心の故郷』自由学園男子部2回生沖島光也、1994年）とある。安田は男子部2回生。
- ³⁸ 前掲、「日誌」1944年8月21日。女子部生徒の学徒動員については以下参照。村上民「戦時下における自由学園の教育（2）戦時下「生活即教育」の諸相」（『生活大学研究』vol. 6、自由学園最高学部、2021年）。
- ³⁹ 例えば1944年9月1日の「日誌」には以下の記述がある。「夕 佐藤初等部寮にて食事。子供たち皆元気」。日常的な宿泊を伴う引率は女性教師が担当したが、佐藤もこうして食事時間などに入り、児童の様子を気遣ったことがわかる。
- ⁴⁰ 南沢寮での生活経験のある人の後年の回想によれば、寮へは「中村橋より都心側」の児童だけが入っていたという。中村橋は現在の西武池袋線の駅であるが、西武新宿線の鷲宮が最寄の児童は入寮していなかった。おそらく中村橋へ出るからだろうとのこと。入寮するか否かは、電車の駅で決められていたのではないかと回想している。（「初等部 南沢寮等に関するインタビュー」自由学園100年史編纂委員会編『自由学園100年史事業 活動報告書V 2015年度』自由学園、2016年、59頁）。
- ⁴¹ 前掲、「日誌」1944年9月3日記述。
- ⁴² 南沢疎開寮では、児童は、週末は自宅へ帰り、週明けに登校し、平日は寮で疎開生活を送っていた（前掲、「初等部 南沢寮等に関するインタビュー」）。
- ⁴³ 前掲、「日誌」1944年8月28日記述。
- ⁴⁴ 記録はないが、南沢疎開寮設置と並行して地方への疎開についても検討されていたのは、疎開対象者が約130名いるが南沢疎開寮の収容人数は80名であり、対象者全員を収容しきれないとわかっていたからかもしれない。
- ⁴⁵ 前掲、「日誌」、1944年8月21日記述。
- ⁴⁶ 同前。
- ⁴⁷ 前掲、全国学童疎開連絡教委議会議編『学童疎開の記録 1』、20頁。
- ⁴⁸ 前掲、村上せつ「那須疎開生活記録」、3頁。
- ⁴⁹ 阿部は主事の佐藤と同郷であり、元岩手県女子師範学校訓導。佐藤が主事として着任した1928年4月には自由学園を見学に訪れており（「日誌」1928年4月23日記述）、その後1933年4月13日に自由学園小学校教師として着任している（同1933年4月13日記述）。
- ⁵⁰ 前掲、佐藤瑞彦「一瞬の夢！」前掲、『あしおと』、12頁。
- ⁵¹ 都は引率教師確保のために、特殊勤務手当や家族の同疎開地への一般疎開奨励など、さまざまな特典を用意したが、多くの国民学校の校長は派遣教師の選抜に苦勞したという（前掲、一條三子『学童集団疎開』、121頁）。
- ⁵² 前掲、「日誌」、1944年8月27日記述。
- ⁵³ 同前、1944年8月28日記述。子ども自筆による。
- ⁵⁴ 同前。
- ⁵⁵ 同前、1944年8月29日記述。
- ⁵⁶ 同前、1944年8月30日記述。
- ⁵⁷ 前掲、「初等部 南沢寮等に関するインタビュー」、57頁。
- ⁵⁸ 「ヨクミル、ヨクキク、ヨクスル」は、1935年4月の初等部入学式で羽仁もと子が語った言葉で、以後、初等部児童が日ごろから大事にしていた目標である。疎開生活時にもこれらを徹底させようとしたことがうかがえる（前掲、「日誌」1944年9月2日記述）。
- ⁵⁹ この荷物搬入の際には、学校から疎開させる校具なども同様に運ぶ必要があったため、中島航空金属会社からトラックを1台まわしてもらっている（前掲、「日誌」1944年9月4日記述）。
- ⁶⁰ 前掲、「日誌」1944年9月5日記述。
- ⁶¹ 那須農場は1941年5月に自由学園が農場用地を購入、男子部生徒が開墾し、同年11月に開いた農場である。初等部の疎開宿舎

- からは直線距離でおおよそ4キロの場所にあった。戦時中、農場には男子部生徒が疎開し、労働と生活をする場となっており、初等部児童の疎開先として検討された記録はない。
- 62 前掲、村上せつ「那須疎開生活記録」、3頁。
- 63 前掲、「日誌」1944年9月6日記述。
- 64 前掲、「日誌」、前掲、『あしおと』。
- 65 1944年の2学期に初等部の5年に転入した高松多加子は、当時を回想して次のように書いている。「私がいた豊島師範では、父兄会が開かれていた。私の学級の疎開地が山形県のあるお寺に決まり（筆者注：豊島師範（第二師範）附属学校の実際の疎開地は山形県南村山郡上山町の旅館だった。再疎開により寺院へ移るのは1945年以降）、厳しい寒さと食糧難が予想される。そこで、出来る限り生徒数を減らすために転校又は縁故疎開を望む。父兄会の席でこの様に言い渡された母は心配し、仲の良かった末永さんの叔母様が先生をなさっておられる自由学園が転校先に選ばれた。この学校の疎開先に農場があり、食糧の心配が少ないだろうということに多くの理由があったのかと思う。」（高松（蘭部）多加子「ニコニコして謝るな」前掲、『あしおと』、90-91頁）。他にも、児童の転入、転出について回想している者は多い（前掲、『あしおと』111頁、126-127頁、前掲、「初等部南沢寮等に関するインタビュー」57頁、62頁、66頁など）。
- 66 前掲、「日誌」1944年9月8日記述。
- 67 同前、1944年9月9日記述。なお、疎開の経費について、一般の国民学校は保護者負担10円とされた（「帝都疎開促進要綱」）。認定学校の場合は「認定学校学童疎開実施特例」にあるように、疎開の経費は基本的に全額保護者負担、ただし、予算範囲内において「輸送」「宿舍（借上げ、整備）」「食費」「寮費」「開設費」については都が負担するとしていた。初等部の疎開の費用等に関する記録はその有無等不明である。
- 68 同前、1944年9月8日記述。
- 69 同前。
- 70 前掲、『あしおと』、46-47頁。
- 71 前掲、「日誌」1944年9月10日記述。南沢に残った1~4年の人数は以下である。1年34名、2年31名、3年29名、4年30名、合計124名が残留した。那須疎開参加者は62名なので、この日時点での全校生徒は186名であった。
- 72 矢島（和田）伸子「運命共同体・「勝つまでは」前掲、『あしおと』、140頁。
- 73 高松（蘭部）多加子「ニコニコして謝るな」前掲、『あしおと』、91頁。
- 74 前掲、村上せつ「那須疎開生活記録」、4頁。
- 75 前掲、羽仁もと子「今は子供を強くする秋です」、3、6頁。
- 76 東京都編『東京都戦災誌』東京都、1953年、228頁。
- 77 前掲、村上せつ「那須疎開生活記録」3頁。
- 78 同前、8頁。
- 79 高良留美子「那須からの手紙」前掲、『あしおと』、135頁。起床時間については、冬季は6時、その後45年3月21日から6時になった（島津（堀江）由子「私の日記から」前掲、『あしおと』、87頁。）。
- 80 国民学校の学童集団疎開での通学は、地元国民学校へ通い、教室を借りての授業実施か、温泉地などでは学寮内での授業の実施が想定された（「帝都学童集団疎開実施細目」）。認定校においても「疎開先ノ教育ハ都立国民学校ノ例ニ倣ヒ疎開先件ト協議ニ依リ設立者ノ直営又ハ地元委託ニ依ルモノトス」とされた（「認定学校児童集団疎開実施特例」）。初等部の疎開はそもそも受入地割り当てなどの枠外で実施された独自のものであったため、地元国民学校の教室を借りることは最初から想定されていなかったと考えられる。
- 81 前掲、村上せつ「那須疎開生活記録」、7頁。
- 82 高良留美子「那須からの手紙」前掲、『あしおと』、134頁。
- 83 前掲、村上せつ「那須疎開生活記録」、10頁。
- 84 「22 東京都国民学校戦時疎開学園設置の件(秘)」1944年4月4日/前掲『資料 東京都の学童疎開』、36-37頁。
- 85 前掲、一條三子『学童集団疎開』、123頁。
- 86 佐藤瑞彦「一瞬の夢！」前掲、『あしおと』、13頁。
- 87 前掲、「日誌」1944年9月25日記述。
- 88 道口（瀬戸）落子「トランペットの音」前掲、『あしおと』、116頁。
- 89 伊丹稔「お母さん、おねえさん」同前、48頁。
- 90 佐藤瑞彦「一瞬の夢！」同前、12頁。
- 91 道口（瀬戸）落子「トランペットの音」同前、116頁。
- 92 1945年1月26日には「このごろは農場から牛乳が一日五升いただけるのでありがたい・味がとてもおいしい」（伊丹稔「お母さ

- ん、おねえさん」同前、51頁）との記述あり。なお、慶應義塾幼稚舎の学童集団疎開では、牛乳確保のために後援会主導で乳牛を購入した。牛乳が子どもにとって貴重なたんぱく源の一つであったことがうかがえる（前掲、柄越祥子「慶應義塾幼稚舎における学童集団疎開に関する一考察」、232頁）。
- ⁹³ 前掲、村上せつ「那須疎開生活記録」、10頁。
- ⁹⁴ 疎開児童への配給については「学童集団疎開ニ伴フ主要食糧等特別配給ニ関スル件」（昭和19年7月30日 19総8873号農商次官ヨリ関係地方長官）において「学童集団疎開ノ実施ニ伴ヒ集団疎開学童ハ主要食糧、味噌、醤油及砂糖ニ付現行ノ配給量（学童給食ヲ含ム）其ノ儘ヲ疎開先ニ於テ配給ヲ受け得ルコトシ以テ疎開ノ促進ニ資スルコトト相成候処」とあり、疎開先で配給を受けることとなった。佐藤が疎開前に都の教育局へ疎開実施についての報告等を行っていたのは、こうした配給等の手続のためもあったと思われる。
- ⁹⁵ 前掲、一條三子『学童集団疎開』、118頁。
- ⁹⁶ なお同日、農場には東那須野国民学校の児童が100名きており、彼等は稲刈りに、初等部児童は大豆畑での作業をしたという（矢島（和田）伸子「運命共同体・「勝つまでは」」前掲、『あしおと』、144頁）。
- ⁹⁷ 高良留美子「那須からの手紙」同前、136頁。
- ⁹⁸ 本郷淳「断片的記憶による那須疎開学級のこども」同前、42頁。
- ⁹⁹ 伊丹稔「お母さん、おねえさん」同前、49頁。
- ¹⁰⁰ 前掲、一條三子『学童集団疎開』、120-121頁。
- ¹⁰¹ 前掲、「日誌」1944年11月24日、26日記述。
- ¹⁰² 望月文子「父母への報告」前掲、『あしおと』、26頁。
- ¹⁰³ 「初等部昭和十九年度一年日誌及び週録」抄録 自由学園資料室蔵。
- ¹⁰⁴ 前掲、「初等部南沢寮等に関するインタビュー」、57頁。
- ¹⁰⁵ 前掲、一條三子『学童集団疎開』、142頁。
- ¹⁰⁶ 高良留美子「那須からの手紙」前掲、『あしおと』、137頁。
- ¹⁰⁷ 松橋（嵩）純子「力はあるもの、だせるもの」同前、124頁。
- ¹⁰⁸ 望月文子「父母への報告」同前、27頁、日紫喜（大羽）順子「生栗とグミ」同前、106頁。
- ¹⁰⁹ 伊丹稔「お母さん、おねえさん」同前、49頁。
- ¹¹⁰ 前掲、村上せつ「那須疎開生活記録」、12頁。
- ¹¹¹ 自由学園とキリスト教については以下参照。村上民「自由学園草創期におけるキリスト教と「自由」問題」（1）～（3）、『生活大学』vol. 5、2020年。
- ¹¹² 伊丹稔「お母さん、おねえさん」前掲、『あしおと』、50頁。労働をクリスマスの贈り物として各部で贈りあうことは、自由学園では現在も行われているが、いつが発祥かは不明。
- ¹¹³ 同前。
- ¹¹⁴ 望月文子「父母への報告」同前、27頁。
- ¹¹⁵ 巡回指導は戦後もしばらく続いた。前掲、「初等部南沢寮等に関するインタビュー」、58、62-63頁。なお、国は45年3月9日に「学童疎開強化要綱」を出し、特に危険な「甲」地域（特に空襲がひどいとされる地域）については3年生以上の集団疎開、1、2年生の縁故疎開の推進を打ち出した。また、同月18日に政府は甲地域における国民学校校舎は軍が転用するとし、実質学校で疎開残留組の児童の授業はできないことになる。都はそれを受けて、「東京都国民学校初等科第一学年及第二学年残留児童教育要領(案)」を作成し、学校では授業を行わない代わりに、地域の神社、寺、集会場などを利用して寺子屋式学習を一日およそ1時間行うこと、教師の不足については、教育経験者、母親などを充てるとした。初等部の巡回指導はこの通知よりも前から行われていたので、直接の関係はないかもしれないが、45年4月以降は甲地域の国民学校で授業は行われなくなった。
- ¹¹⁶ 望月文子「父母への報告」前掲、『あしおと』、28頁。文部省は1944年9月より疎開児童の越冬のための物資について加配を検討、その中にはバターも含まれていたが（前掲、一條三子『学童集団疎開』、140頁。）、初等部のバターは4年児童の荷物と一緒に届いたとのことなので、おそらく配給とは別のものと思われる。鮭缶、バター共にどのような経緯で送られてきたのかは記録がない。
- ¹¹⁷ 望月文子「父母への報告」、前掲、28頁。
- ¹¹⁸ 織田智子「貴重にして異常な体験 家への手紙」同前、31頁。
- ¹¹⁹ この菓子とは、1945年1月22日に引率者の野坂が宇都宮へ取りに行っている（望月文子「父母への報告」同前、29頁）。
- ¹²⁰ 同前、32頁。
- ¹²¹ 同前、29頁。ちなみに前述の文部省による各地疎開児童の越冬のための物資特配ではスキーも検討されていた。
- ¹²² 前掲、村上せつ「那須疎開生活記録」、5頁。

- 123 伊丹稔「お母さん、おねえさん」前掲、『あしおと』、48頁。
- 124 織田智子「貴重にして異常な体験 家への手紙」同前、33頁。
- 125 1945年5月に、那須農場へ疎開していた男子部生徒が初等部の疎開先の庭に防空壕を掘ったとの回想があるが（本郷淳「断片的記憶による那須疎開学級のこども」同前、4頁）、通牒との関係は定かではない。
- 126 「184 初等科第六学年集団疎开学童の帰京並びに昭和二十年度学童集団疎開継続実施に関する件」前掲、『資料 東京都の学童疎開』、364頁。
- 127 前掲、一條三子『学童集団疎開』、144頁。
- 128 織田智子「貴重にして異常な体験 家への手紙」前掲、『あしおと』、38頁。
- 129 望月文子「父母への報告」同前、30頁。
- 130 3月4日の記録に「六年生は十日の十一時三十分の汽車と決りよいよ用意をすることになりました。」との記述がある（同前）。
- 131 織田智子「貴重にして異常な体験 家への手紙」同前、38頁。
- 132 同前、130頁、133頁、145頁。
- 133 前掲、一條三子『学童集団疎開』、145頁。
- 134 同前。
- 135 女子部26回生「勤労報国隊日記 10」1945年3月26日記述。
- 136 前掲、村上せつ「那須疎開生活記録」、5頁。
- 137 前掲、「初等部南沢寮等に関するインタビュー」、58頁。なお、このとき那須にはほかにも2年生男児が1名いたという。正確な人数は不明だが、きょうだいがいる場合、1〜3年も那須疎開寮へ参加していたようだ。
- 138 [梶浦勝義インタビュー 2019年6月21日]。梶浦氏によれば、同学年の女子児童が1名地元から通っていた。なお、初等部の入学試験が行われたかは不明だが、梶浦氏の父、浩二郎氏の1945年の日記には「四月七日 土曜（中略）勝義の自由学園入学許可書を受く」との記述がある（[梶浦家寄贈資料 梶浦浩二郎氏日記 昭和19年1月1日〜昭和21年12月27日] 自由学園資料室蔵）。
- 139 前掲、村上せつ「那須疎開生活記録」、5頁。
- 140 前掲、『学童疎開の記録 1』、40-41頁。
- 141 女子部は創立当初から使用人をおかず、自分たちで生活を創り出すことを目指した。昼食も「実際科」の一環として交代で作られ、全校で食堂に集まって食べることが教育活動の一部となっていた。そうしたことも、疎開先で団体食を作る際に活かされたとも考えられる。
- 142 前掲、村上せつ「那須疎開生活記録」、14頁。
- 143 同前。
- 144 高松（菌部）多加子「ニコニコして謝るな」前掲、『あしおと』、92頁。
- 145 これらが栄養失調の症状と教師が知ったのは疎開後だったようだ。下痢であることを言うと食事の量を減らされるからと、隠している子も多かった（前掲、村上せつ「那須疎開生活記録」、17頁）。
- 146 伊丹稔「お母さん、おねえさん」前掲、『あしおと』、52頁。
- 147 同前。
- 148 小圃（谷口）知子「私の日記から」同前、56頁。
- 149 伊丹念「お母さん、おねえさん」同前、53頁。
- 150 小圃（谷口）知子「私の日記から」同前、59頁。
- 151 『朝日新聞』1945年8月17日。
- 152 前掲、村上せつ「那須疎開生活記録」、28-29頁。
- 153 前掲、一條三子『学童集団疎開』207頁。
- 154 羽仁峰生「強烈で鮮明で」前掲、『あしおと』、104頁。
- 155 伊丹稔「お母さん、おねえさん」同前、53頁。
- 156 小圃（谷口）知子「私の日記から」同前、59-61頁。
- 157 小林裕「思い出すままに」同前、68頁。
- 158 前掲、[梶浦浩二郎氏日記] 自由学園資料室蔵。
- 159 松本忠久「那須の思い出」前掲、『あしおと』、122頁。
- 160 回顧座談会「後世に語り継ぐべきこと」日本私立小学校連合会編『日本私立小学校連合会 結成50年のあゆみ』1992年、60頁。なお、武蔵野学園は空襲の激化により44年に小金井、その後御嶽山麓へ疎開した（むさしの学園小学校HP/ <http://www.musashino-gakuen.com/school/spirit/>）。

- ¹⁶¹ 米田俊彦「図書紹介」『幼児教育史研究』12巻、2017年、68頁。
- ¹⁶² 戦時中、全国で34校の私立小学校が廃校し、児童数は1940年の31,545人から1946年には17,403人にまで減少した（『日本私立小学校連合会 結成50年のあゆみ』1992年、116頁）。
- ¹⁶³ 前掲、柄越祥子「慶應義塾幼稚舎における学童疎開の展開 慶應義塾幼稚舎東京本部を視点として」、250-251頁。
- ¹⁶⁴ 1945年度初等部2年生だった宮崎蓉子は2年時（どの時点かは不明）のクラス人数は定員30名に対して19名、5年で転校する直前は29名だったと回想している（前掲、「初等部南沢寮等に関するインタビュー」、61頁）。
- ¹⁶⁵ 前掲、村上せつ「那須疎開生活記録」、6頁。
- ¹⁶⁶ 再疎開については前掲、一條三子『学童集団疎開』に詳しい。
- ¹⁶⁷ 前掲、中村早苗「青山学院緑岡中等学校の学童集団疎開」。
- ¹⁶⁸ 稲葉一彦「440日を耐えて—学童集団疎開の記録—」立教女学院『紀要』No. 4、1975年。
- ¹⁶⁹ 慶應義塾幼稚舎「疎開学園の記録」編集委員会『慶應義塾幼稚舎疎開学園の記録 上』慶應義塾幼稚舎、2015年。
- ¹⁷⁰ 『成城学園九十年』編集小委員会編『成城学園九十年』学校法人成城学園、2008年。
- ¹⁷¹ 前掲、『学童疎開の記録 1』、408頁。
- ¹⁷² 初等部の疎開体験者である高良留美子は当時の手紙について「「元気です」というのは主観的には嘘ではなかったかもしれないが、「楽しかった」「面白かった」という言葉は書きながらもずい分抵抗を感じたものだ。ほんとうには楽しくも、面白くもなかったからだ。（中略）だからこれらの手紙は、那須の集団疎開生活の一つの記録ではあっても、ほんとうのことはなにも書かれていないとさえいえるかもしれないのだ。」と回想しており、当時の記録をどのように読むかについて重要な示唆を与えているといえよう（前掲、『あしおと』、138頁）。また、同様の理由から疎開当時に書かれた子どもの作文『那須にて進歩したこと（子供達記録）』（1945年1月、那須へ疎開していた当時の5、6年児童が疎開生活の中での自分の変化について書いた作文。このうち6年生児童執筆の7篇は『婦人之友』1945年4月号「生活は育てる生活は励ます—集団疎開学童の報告書より」に掲載されている）についても今回は資料として扱っていないが、今後の調査分析が必要だろう。

「100年史関連論考」は、自由学園100年史（デジタルアーカイブ）編纂の基礎調査の成果を直接間接に下敷きとし、その調査過程で生じた論点を、著者の視点で深めた試論です。100年史編纂委員会による確認を経ますが、各論考の内容責任は著者にあります。なお、論文で使用している資料は、原則として自由学園資料室の公開基準内のものですが、一部、現在整理中の未公開資料を使用している場合があります。詳細については自由学園資料室（042-422-1097）へお問い合わせください。